アリアンロッド　リプレイ

ブライトナイト　2

大海の決戦

沢渡　祥子

アルシャード　ブライトナイト - 目次

1.
    1. はじめに
    2. 登場人物紹介
        1. シオン・シュタゥク
        2. クリス
        3. ジール・田中
        4. レキ・ストランド
        5. フリーデ
        6. 【オープニングフェイズ】
    3. ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：ジール・田中
    4. ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：レキ・ストランド（同行者：全員）
    5. ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク
    6. ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：クリス
    7. ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：フリーデ
        1. 【ミドルフェイズ】
    8. ＳＣＥＮＥ　１　マスターシーン
    9. ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：クリス
    10. ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：ジール・田中
    11. ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク（同行者：クリス）
    12. ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：ジール・田中（同行者：レキ）
    13. ＳＣＥＮＥ　６　シーンプレイヤー：クリス（同行者：シオン、フリーデ）
    14. ＳＣＥＮＥ　７　シーンプレイヤー：ジール・田中（同行者：レキ）
    15. ＳＣＥＮＥ　８　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク
    16. ＳＣＥＮＥ　９　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）
    17. ＳＣＥＮＥ　１０　シーンプレイヤー：ジール・田中　（同行者：全員）
    18. ＳＣＥＮＥ　１１　シーンプレイヤー：クリス　（同行者：全員）
    19. ＳＣＥＮＥ　１２　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：全員）
    20. ＳＣＥＮＥ　１３　シーンプレイヤー：クリス
    21. ＳＣＥＮＥ　１４　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：全員）
        1. 【クライマックスフェイズ】
    22. ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）
        1. ■戦闘Ⅰ　VS 帝国強化兵（モブ）４人×２グループ■
    23. ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）
        1. ■戦闘Ⅱ　VS 帝国親衛隊“銀十字軍”カイラス・グーデリアン少佐■
        2. 【エンディングフェイズ】

24. ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：クリス、フリーデ）
25. ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：クリス
26. ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：ジール・田中
27. ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：レキ・ストランド
28. ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：フリーデ　（同行者：シオン）

第二話　『大海の決戦』

はじめに

この本は、テーブルトークＲＰＧのリプレイです。システムは「アルシャード」。

「テーブルトークＲＰＧ」及び「リプレイ」に関する説明は、ここでは省きます。
今回は６人で遊んでおり、５人がそれぞれ自分の「キャラクター」を操作し、一人が物語の進行役（ゲームマスター、ＧＭ）を担っています。

「アルシャード」は、2002年にエンターブレインから出版された日本産のＴＲＰＧシステムです。ファンタジー世界での冒険を扱っており、2005年に改訂版「アルシャードff」が出版されています。
プレイヤーは「神々の力を受け継いだ英雄」となり、「奈落」という宇宙を蝕む負の勢力との戦いを繰り広げます。

ＴＲＰＧの中でも比較的演出色が強いシステムで、プレイヤーには「状況に応じた的確な判断と対抗策」よりも、「その場に合う格好いい台詞とリアクション」が求められます。
ＧＭの進め方も展開重視なところがあり、プレイヤーが何をやってもさらわれるヒロインはさらわれるし、つかまるシーンはつかまります。作戦内容にかかわらず突入するシーンでは突入しますし、成功も失敗も話の流れ優先です。
――そんな「お約束」をある意味楽しみながら自キャラの演出に励むのが、このシステムの特徴的なところかと。

そのため、これまでのＴＲＰＧリプレイとは少々毛色が違うものになっているかと思います。ご了承ください。

今回は公式キャンペーンシナリオ「ブライトナイト」を使用しています。
ファンタジー世界の英雄譚ですが、ロボットものの色あいが強く――はっきり言って、ガンダムから採用したとしか思えないネタが満載です。

では、今回のおはなしへ――。

登場人物紹介

シオン・シュタゥク

「君を一人で行かせるわけにはいかないじゃないか！」
「ぼ……僕だって戦える！」

男／人間／15歳　　主人公・人型甲冑アームドギアの乗り手
肌／黄　髪／黒　瞳／黒　身長：163cm
シャードの形：曲玉型のイヤリング

【レベルとライフパス】
パンツァーリッター１/ファイター２
特徴　　：神の恩恵・美形（異性の反応がきわめてよい）
クエスト　　：運命への反逆

【プロフィール】
セッション開始時点ではまだクエスターになっていなかった島の少年。息子への関心の薄い発明家の父親と、修理したヴァルキリーと住んでいた。
父の発明した『アームドギア』に乗り込み、プリムローズと協力して帝国と戦う主人公。

クリス

「私は一体何者なんですか？」
「シオン君、あなたばかね……！」

女／人間／16歳　ヒロイン・シャードの巫女
瞳／青　髪／金　肌／肌　身長：160cm
シャードの形：緑の八角形、ケインに付属

【レベルとライフパス】
オラクル１／ホワイトメイジ１／ブラックマジシャン１
特徴　　：美形（異性の反応がきわめてよい）
クエスト　　：失われた記憶（出自／喪失）

【プロフィール】
　本キャンペーンのヒロイン。出自ライフパスはもちろん「神の恩寵（特徴：美人）」。記憶を失っている。シャードの意思を形で受け取れる特殊な才能を持つ巫女。

ジール・田中

「俺は別にヒーローじゃない」
「だから言っただろう。私に任せたまえと」

男／人間／26歳 はたらくニンジャ
肌／イエロー　髪／ブラック　瞳／ブラウン　身長：174cm
シャードの形：黒い手裏剣
【レベルとライフパス】
エージェント１/スカウト1/ニンジャ１
特徴　　：質実剛健（耐久力＋２）
クエスト　　：敵討ち
【プロフィール】
　どんな時でも名刺を出して忘れず挨拶、ゼネラル・マテリアル社に勤務する特殊工作員。本社の指令によりプリムローズの活動に協力している。スーツ姿にニンジャ頭巾が標準装備。口癖は「ニンジャですから！」

レキ・ストランド

「皆は、あなたを守るために戦っている！」
「シオン、クリスだけは守り抜けよ！」

男／人間／３３歳　復興を誓う王国の元騎士
肌／焦茶　髪／黒　肌／肌色　身長：185cm
シャードの形：虹色の八角柱のリング
【レベルとライフパス】
サムライ１→２/ファイター１→２/ハンター１
特徴　　：質実剛健（耐久力＋２）
クエスト　　：王女の探求

【プロフィール】
　十数年前に滅びたウェストリ王国に仕えていた騎士。祖国の復興のため、反乱組織プリムローズに身を投じる。行方不明の王女の行方を追っている。帝国将校“灼熱の”アインを仇と狙っている。

フリーデ

「心得ております」
「シオン様はわたしから離れないでください」
　女性型／ヴァルキリー／年齢不明　　戦うお手伝いさん
　肌／白　髪／銀　瞳／水色　身長：164センチ
　シャードの形：水色の涙滴型
【レベルとライフパス】
　ヴァルキリー１→２／ハンター１→２／ホワイトメイジ１
　特徴　　：第六感（セッション中に１回、【知覚】判定の振り直し）
　クエスト　　：マーカスへの恩返し
　コネクション：マーカス・シュタウク（主人）
【プロフィール】
　２年前に主人公の父親マーカスによって修理されたヴァルキリー。記憶が欠損しており、再稼働する前のことを覚えていない。マーカスが亡くなった今はシオンを主として仕えている。

【オープニングフェイズ】

ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：ジール・田中

◇ジール・田中　　エージェント１／ニンジャ１／スカウト１
26歳・人間・男
今回のコネクション：クラリス・ファーレン（関係：慕情）
ゼネラルマテリアル社に勤務する特殊工作員。ニンジャなサラリーマン。
某人物の描いた肖像画により、彼の正装はスーツ＆眼鏡＆黒頭巾であることが判明。

GM ：前回、ホワイトスネイク号に乗り込みましたね？　そこには同じ会社の社員が乗ってます。
田中　：（ハンドアウトを確認しつつ）クラリスだったっけ。
GM　：そうです。彼女は医療担当者であなたとも面識があり、何度か世話になっています。女神のような人でＧ＝Ｍ社内でも非常に人気が高く、わざとケガをしたり病気のふりをして彼女の看護を受ける人もいるくらいです。
フリーデ：どっかの中学生かい、ゼネラルマテリアル社。
田中　：和気藹々なんですよ、うちの会社は。
GM　：その彼女が満面の笑みで「お久しぶりですね、ジールさん」
田中　：「君か」と目をそらしながら、スーツケースのコソっとしたものを後ろに隠します。（注：前話参照。まだ続いていたんですねこのネタ……）（笑）
GM　：「あら、どうしたのかしら？」
田中　：「いやいや何でもない。君が乗り込んでいるというのはどういうことなのかな」と、聞くだけ聞こう。
GM　：「わたしもＧ＝Ｍ社の人間ですから。任務が終わるまではご同行させていただきます」
田中　：「ははははは……」と軽く乾いた笑いをして、コソっとしたものを後ろに隠しながら「疲れたんで俺はちょっと休むよ」と。
GM　：「え、体の調子が悪いんですか？」と。
田中　：「いやいやいや。寝れば治るから、大丈夫！　ではサラバ！」
GM　：別れの際に「ジールさん、頑張りましょうね～」と満面の笑みで手を振っています。
田中　：引きつりながらささささささ、と下がっていく。
GM　：下がっていく時に何人かの殺気が！
田中　：気づきませんよ、コソっとしたものを隠すために必死。
GM　：あなたが通り過ぎた後に「あいつ誰？」「クラリスちゃんの何なんだ！？　親しそうにしていたぞ」「どこの奴だ、調べ上げろ！」と。（笑）
シオン　：コソっとしたもの見られたら破滅ですよ。
田中　：大丈夫、シオンのところに隠すから。これは最後の最後で明かされるんじゃないんですか。そのまま自分の場所に戻ります。
GM　：部屋には書類が届いています。『君の任務は……』という出だしで、例の上司からのようです。
田中　：内容はどんなですか？
GM　：『君も大変だろうけど、今回はプリムローズへの補給物資の輸送をよろしく』と書いてあります。『追伸、クラリスをよろしくな。何かあったらお前命を狙われるぞ』
田中　：はあ……、と溜息ついて。心の中で「俺がしなければならないのは、ガキの相手と女性の相手か……」
GM　：ということで、クエストを渡します。――『クラリスを助ける』
田中　：まさか……いや、言ったらそうなる！　元ネタを考えたらそうなるからやめておこう！　スカウトLv上げておけばよかったか。（笑）
フリーデ：そんなストレートにくるかなあ？
田中　：こないとは思うんだよ。信じているよ俺！
レキ　：でも海の上だし。

シオン　：ルパン走りしようにも海の上じゃねー。だいたいさらわれるんだったらヒロインの役目なわけだし……。

ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：レキ・ストランド（同行者：全員）

◇レキ・ストランド（サムライ２／ファイター２／ハンター１）
33歳・人間・男
今回のコネクション：ゲイル・ヴァルサー（関係：友人）
反乱組織プリムローズに身を置く戦士。10年前に滅んだウェストリ王国の元騎士。
行方不明の王女の行方を追っている。

GM　：このシーンは皆さん登場ですので、チェックつけておいてください。全員、次の作戦のミーティングに参加しています。
シオン　：みんな登場するの？　まだ自分がどんなキャラか思い出せなくて困ってるんだけど。
クリス　：とりあえず、パズーとアムロ足して２で割ればいいんじゃない？（笑）
シオン　：パズーとアムロって、接点なくてものすごい大変なんだけど。
田中　：ポジとネガ足すと消えちゃうんで、普通の人になりますね。無個性だなー。
GM　：今回の作戦はプリムローズの協力者である海賊ゲイルの元に、Ｇ＝Ｍ社から供給された補給物資を運ぶことです。
フリーデ：それ『作戦』ですか？　『目的』じゃなくて？
田中　：まあ、実際は図があって、こうなっててここ通って、みたいな作戦を練っているんでしょう。
GM　：一海賊であるその人物に何故補給物資を渡さなければいけないかというと、ゲイルの一味は帝国の補給艦を狙って攻撃をかける、義賊ってわけじゃないですけどそういう海賊らしいんで。
シオン　：私掠船みたいなもんなんだ？
GM　：そうですね。だから反乱分子でもあるプリムローズとも仲がいいんです。ゲイルは帝国軍に狙われていますので、補給物資を渡す時に帝国軍と戦闘が行われることは必至です。作戦指令官は「敵と一戦交えたなら戦火は甚大になるだろう。それでも皆の力を合わせればきっと乗り越えられるはずだ。ぜひとも頑張って欲しい！」
田中　：つまり、敵はズゴック（注：『機動戦士ガンダム』１年戦争時のジオン公国の代表的な水陸両用モビルスーツMSM-07）に乗ってくるということじゃないですか？（笑）
GM　：ゲパルド・ギアは歩兵しか確認されていません。勝手に１年戦争を交えないように。
田中　：あ、そうだね。いかんいかん。本当に出てきた時が怖いから言わない方がよかった。
レキ　：「海上であれば、船で攻めて来るだろう」
GM　：話の中で『ゲイル』という名前が何度が出きます。ちょっとひっかかった人物がいるはずですが……。
レキ　：はい。
クリス　：あ、そうだ、ほんとだ。（注：レキとクリスの今回のコネはゲイル・ヴァルサーでした）
GM　：【理知】判定で思い出せます。目標値７くらいで振ってください、簡単に出ます。
フリーデ：ダイス振ると、思い出せなかったりするんですよ？
クリス　：（ころころ１ゾロ）……。（笑）
レキ　：（ころころ）行き当たりました。
GM　：レキ君にはわかります。彼は過去にウェストリ王国の騎士団にいた同僚です。奔放で豪快な性格で、騎士団の中ではちょっとズレた……けれど人望は厚い人物で、海賊と言われてもしっくりくるなと。
レキ　：奴の性には合っているだろう、という感じなんですね。
GM　：あなたの記憶では、「レキ、まだまだこれからだぜ！」と酒を浴びているゲイルの姿が
。

レキ　　：酒か。
フリーデ：海賊の他のメンバーも騎士団の人なんですか？
GM　　：それはわかりません。
フリーデ：先方とは連絡は取れていて、どういう形で接触するのかは決まっているんですよね。で、その中に最初から危険も見込まれているよという話？
GM　　：そうですね。
フリーデ：プリムローズとしても、初めての作戦じゃないんですよね。
GM　　：そうですね。ただ、今回は自分たちも大それたものを持ってるのでより危険度は増すけどよろしくね、ということです。
フリーデ：……まあ、そこはいろいろと都合があったんでしょう……。受け渡し場所は陸ですか、海ですか？　それはちょっと重要。
GM　　：そのことを聞くんですね？
フリーデ：……えーと、わたしが発言するのはちょっと控えたいです。
GM　　：別にいいと思いますよ。
フリーデ：いえ、発言する気はないんです。
レキ　　：「詳しい作戦内容を教えてください」ということにして私が聞きましょう。
GM　　：場所は海上でやるらしいです。『陸で受け渡しをしたら海賊でなくなる』というわけのわからん言い分をしているらしいですが。
田中　　：かっこいいな。ロボットものちっくでいいですね。
レキ　　：受け渡しまでの日にち等々はどうなんでしょう。
GM　　：あともう１日。今は最終打ち合わせみたいな感じなわけです。
シオン　：ラストブリーフィングですか。
フリーデ：じゃ、「必要であれば、船の周りは私が見て参ります」って言います。
GM　　：彼らは船の上から見張るしかないし「頼みます」って言うね。
クリス　：「私に何かできることはありますか？」
GM　　：「ゆっくりお休みください。あなたのように帝国側から狩られる側の人間は、表にいるとロクなことがないですから」
シオン　：「僕のアームドギアはどうすればいいんだろう。海上じゃ役に立てないよ」
田中　　：アムロ的発言。グッジョブ！
シオン　：僕の、がポイント。
GM　　：「何とかなるという話を聞きました。極秘に開発された最新兵器、ものすごいのではないかとみんな期待していますよ」
レキ　　：「過剰な期待は控えてもらいたいところだが……」
シオン　：マニュアルすらないんだよ。
田中　　：大丈夫、睡眠学習で。（笑）
シオン　：嫌ー、最後は足だけで帰ってくるのは嫌ーっ。（←これ、ネタは何でしょう？　睡眠学習ってことはザンボット３かな）
GM　　：「明日作戦決行だが、帝国海軍が出てくることは十分に考えられる、気をつけたまえ。では解散」
田中　　：「わかった」みたいなことをとりあえず言う。
GM　　：田中さんの横にいたクラリスが「はい！」と両手の拳出しながら頷いていますね。「頑張りましょうね、ジールさん！」
レキ　　：「ではみんな、また明日」
GM　　：レキだけ残ってくれ、って残ります。「ゲイルと知り合いらしいじゃねえか」
レキ　　：「昔ちょっとね。世話をしたというか世話をされたというか……」
GM　　：「無事にこの作戦が成功したら、酒でも飲みに行くのかい？」
レキ　　：「そうだな……。無事に終わればの話だが」

GM　：「今回は帝国を滅ぼすための新兵器が搭載されているから大丈夫だろう。はっはっは」ぽん、と肩を叩いて去っていきます。
レキ　：「兵器はすごいんだけどね……」
クリス　：兵器は？
シオン　：乗っている者が安定していないから。
レキ　：ゲイルを思い出しながら帰っていきましょう。
GM　：レキさん、クエストを渡します。『補給物資をゲイルに届ける』。

ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク

◇シオン・シュタゥク（パンツァーリッター１／ファイター２）
15歳・人間・男
今回のコネクション：マーカス・シュタゥク（関係：保護者）
本キャンペーンの主人公。島に発明家の父親と住んでいた。
父の遺作となったアームドギアに乗り込み、反帝国活動をすることに。
王道な富野系の主人公を目指す予定……。

GM　：君は作戦の前準備として、アームドギアの確認に格納庫に向かいます。
シオン　：なるほど。……俺の考えていた通りだ。
GM　：整備員が目を輝かせてます。「このフォルム、この強さを現す形状、素晴らしいですよ！　無骨な武器なんかつけたくなっちゃいますね～」
シオン　：「ド……ドリルはやめてくださいね」（笑）
フリーデ：両手をドリルに変えたいなー、みたいな？
GM　：「幾つか不明な点がありましたから、そういう機能もあるかもしれません。古代の技術を使っているらしく、私たちにはわからないんですよ」
シオン　：「……お願いです父さん、人類が制御しきれる機能であってください」
田中　：暴走する可能性もあります。お母さんのネタも入っているでしょう。（by『新世紀エヴァンゲリオン』。お母さんが入っているエヴァはよく暴走します）
シオン　：アレは彼の中では幻想の人でした。現実に生きる少年です。
田中　：助けられたのも偶然ですか。機械に語りかけないんですか？
シオン　：僕は兵器を兵器として扱うから。
GM　：整備員は「私たちは別なものの整備にかからなければならないので、これで」
シオン　：「コクピット内のことは自分で整備します」って乗って……まだ１回しか乗ったことないんだよな。コクピット周りを自分でいじっています。
GM　：シートまわりを整備するわけですね。
シオン　：正確に言うと、シートまわりを完全に合わせないと。
田中　：いや、何故かぴったり合っているんじゃないですか。父さんは君ごと売ろうとしていたわけだから。（笑）
GM　：ぴったり合っていますね。自分に合わせたとしかいいようがない。
田中　：それはヴァルキリーの仕業があるかもしれない。
フリーデ：『今月のシオン様の身体データです』って。
レキ　：博士に『パンツァーリッターは来ても必要なかったと』言われましたからね。
シオン　：最初からセット販売する気だったんですね。でも父さん、１年後には乗れないんじゃないかい。
フリーデ：そこは可動できるようになっていますから。
シオン　：でも父さん、この謎のスイッチは何なんだい？（笑）
クリス　：押してもブタが木に登るだけかもしれない。（by『タイムボカン』）
GM　：そうすると、開いているハッチの横から少女の顔が覗き込んできます。「こんにちは、熱心ですね」儚げな、可憐な少女です。
シオン　：「こんにちはー」
クリス　：キャラがかぶるじゃないか！
シオン　：やばいよ、立ち位置なくなってくるよ。
クリス　：じゃ、ちょっと闇に乗じて。
田中　：いえ、正当派で勝つんです、正当派で！
GM　：「私はソフィー・ウィルマー」

フリーデ：おお！？
レキ　　：ちょっと待てい！　何故いる！？
シオン　：プレイヤーは知っているけれどキャラクターは知らねえ。
クリス　：ソフィー・ウィルマー？
GM　：反乱軍プリムローズの首謀格、ハンス・ウィルマーの妹、17歳。自身もシャード持ちのために狙われています。兄の武力行使による姿勢を好んでいない平和主義者で、プリムローズのシンボルですね。（『アルシャード』P171参照）
シオン　：「ソフィーさんですか、初めまして」
GM　：「初めまして。あなたがマーカスさんのご子息のシオンさんですね」
シオン　：「うちの父を知っているんですか？」
GM　：「ええ、とても。今回は本当に……大変でしたね」
シオン　：「でも父、満足した死に顔でしたし」
GM　：「ごめんなさいね、私たちが関わったばかりに」と、涙目ちっくになっています。
シオン　：「そんなこと気にしないで結構ですよ。どうやら父、他にも何か関わっていたらしいので。息子の僕は何も知らないんですけどね」
GM　：「そうですか……」
シオン　：「『私たち』って言っていますけど、ソフィーさんはプリムローズの関係者の方なんですか」
GM　：きょとんとした顔をした後でくすっと笑いながら言います。「私の名字、さっき教えたでしょう？」
シオン　：「ソフィー・ウィルマーさん？」
GM　：「ま、知らないなら知らないでいいです」
シオン　：「はい、じゃ、気にしないでおきます。とりあえずですね、父さんは僕ごとプリムローズに渡すつもりだったらしいんで、何も気にしないでいいですよ。プリムローズ自体を利用する気だったみたいですから」
GM　：「そんな人じゃなかったと思いますけどね……」
シオン　：「だって父さんなんか、最後に……」……何だっけ？
田中　　：『お前はお前の道を進め！』
シオン　：そんなこと一言も聞いてねえ！（笑）
田中　　：くそ、ねつ造失敗。（笑）
GM　：「このアームドギアのシャードにあなたは選ばれたんですよ。何故シャードがあなたを選んだのか、考えておいてくださいね」
シオン　：「もう自分で選択した道ですので、思いきり何とかしますよ」
クリス　：前向きな発言だな。
GM　：「また会うことがあるかもしれませんが頑張ってくださいね。話ができて嬉しかった」
シオン　：「僕も……疲れが抜けたというか、楽になりましたよ。愚痴が言えるっていいですね」
GM　：で、遠くでかすかに「ソフィー様、一体何をしているんですか、こんなところで！」と。
シオン　：「偉い人の関係者なのかなー」
GM　：あなたにクエストを渡します。『シャードに選ばれた意味を考えなさい』
レキ　　：重いな。
シオン　：すごい抽象的だね。
田中　　：戦っている最中にアムロみたいに叫んでみればいいだけじゃないっすか、テキトーに。
フリーデ：その辺はマスターのジャッジ次第ですね。『僕はどうしてこのシャードに選ばれたんだー！？』って言っていればＯＫなんだったら、テープ再生するように繰り返して

いればいいわけですけど。

ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：クリス

◇クリス（オラクル１／ホワイトメイジ１／ブラックマジシャン１）
16歳・人間・女
今回のコネクション：ゲイル・ヴァルサー（関係：忘却）
本キャンペーンのヒロイン。記憶を失っている巫女。
目標は宮崎系ヒロインの爽やかさであり、クラリス路線。
シャードの声が聞こえる……というよりは、シャードに振り回されているような。

シオン　：ここでヒロインっぽくなかったらまずいぞ！
クリス　：でも、テンション忘れかけているからさー。
GM　：あなたは作戦会議の後、部屋で休憩しています。いろいろと考え事をします。今までの出来事、これから起こるだろう出来事、何故指輪を託されたのか。――その中で、さっき作戦名の時に上がった名前……。
クリス　：ゲイルですか。
GM　：はい。あなたはさっき思い出すことができませんでした。でもどこか気にかかる。記憶を辿っていると、シャードの意思が君に流れ込んできます。――『ゲイルと名乗る者に会えば、マーカスに託された指輪の秘密がわかる』
クリス　：「ゲイルさんって一体……何者なの？」と。
田中　：そうだよね。１ゾロだしなー。（笑）
GM　：シャードは『巫女よ、ゲイル・ヴァルサーに会うのだ。新たな運命が拓けよう！』と仰々しく言います。
クリス　：ということはあれね、引っ込んでろと言われたのにのこのこと出ていかなければいけないわけですね。（笑）
田中　：んー、なんか前と同じようなパターンな気が。
シオン　：何ていうか、それがヒロインぽい。
クリス　：あとは私の演技か、おい。
シオン　：イエッサー。
GM　：もう一度判定して記憶を辿ってください。目標値６なんで、大丈夫でしょう。
クリス　：（ころころ）一応出たのかな？
GM　：以前に聞いたことある、しかも懐かしい感じがします。それが一体何なのか、そこまでは思い出せませんが。――ということでクエスト、『ゲイルに会う』
フリーデ：こっちはジャッジのしやすそうなクエストですね。

ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：フリーデ

◇フリーデ（ヴァルキリー２／ハンター２／ホワイトメイジ１）
ヴァルキリー・女性型・製造年不明
主人公と主人公の父親によって修理された、記憶喪失ヴァルキリー。
今回から、マーカスの息子のシオンがマスターに格上げ。

GM　：君は、元の主人の息子のシオンと行動を共にすることに決めましたね。
フリーデ：はい。
GM　：で、マーカスのことを思い出していると、登録されたメモリを見つけて自分の中で開きます。マーカスはそこに遺言を残しておいたらしいです。
フリーデ：わたしが気づかないうちに登録されてたんですね。
GM　：読むと、言っていることは前回の最後に思い出したこととほとんど同じです。『シオンにはまだお前の助けが必要だ。これからもあいつを助けてやってくれ、頼む。これから奴は自分の思いとは関係なく大きな運命に動かされていくだろう。その時の助けになってくれ』と。
フリーデ：再度それを再生して、メモリは元の状態に戻しておきます。でも自分にとっては、言われようと言われまいとあまり影響のないことです。
GM　：本当にそんなでしょうね。あなたはシオンを助けることを改めてかみしめて……というのかな、それは自分で消化してもらって。
フリーデ：自分にとって当たり前のことなので、今更、心の中で決心することでもないですね。
GM　：元々ヴァルキリーですからね。マスターのやることだから、付き従うみたいなのがあるのかな。
フリーデ：いや、『～だから付き従う』って考えて行動してるんじゃなくて、そうするものだからするだけです。電気のスイッチを入れると明かりがつくことにそれ以上の意味はない、っていう。
田中　：ほー、かっこいー。
フリーデ：でも、マスターの入れてたそのメモリはあったかい気がして、大事にとっておこうかなという感じ。
田中　：うまくまとめましたね。そこら辺がシャード持ちっぽいですね。
GM　：そうすると、「すいません、フリーデさん。哨戒任務に出てもらえませんか」
フリーデ：「範囲はどこですか」
GM　：本当に船の周りくらいです。今はまだ合流地点に向かっているさ中で、自分たちの船体を守るためたみいな感じで。
フリーデ：「承知致しました」
GM　：ということで、クエストで『シオンを守る』

【ミドルフェイズ】

ＳＣＥＮＥ　１　マスターシーン

GM　：場所は帝国、銀十字軍(ジルベルクロイツ)の将校にあてがわれた執務室の一部屋。２人の軍人がいます……。（←ちょっと辛そう）

フリーデ：ど、どうしましたＧＭ！？　辛いんですか？

田中　：マスターに何か飲み物を！

シオン　：俺的には『２人の将校』って言われた瞬間に……。（注『機動戦士ガンダム』６話に、某２人の将校が酷似した状況下で会話をするシーンがあります）

GM　：言うな、言うな黙れ！　言うなー！

フリーデ：頑張ります。このシーンはみんなは笑わない！

GM　：言うぞ。言うぞ。――片方の男が口を開きます。書類に目を通しながら「“灼熱の”アインともあろう者が、こうまで手こずるとはな」と。仮面をつけた将校が「フッ……言うなよ、カイラス」と。彼は数枚の写真を取り出し、男に渡します。写真には例のアームドギアとホワイトスネイクが写っています。

もう１人の将校は「ほう、これが例の新型か。そしてこの船はＧ＝Ｍ社の工作船だ。うまく偽装はしてあるが……」アインが「そう、普通の船に見せかけているがかなりの戦闘力がある。“白いやつ”ともども落とせれば金剛十字勲章(ディアマンテンクロイツ)ものさ（注：ちなみに元ネタでは『ジオン十字勲章』・笑）」」将校が言いますね。「この件はぜひ私に任せてくれ。兄上の手前もあるのでな」

シオン　：…前髪くるくるー。

田中　：『兄上』ですか、ちょっと違いますね。

GM　：アインは当然のことだという表情で「なあに、構わんよ。私は先の偵察戦で失敗を犯してしまった、いわば謹慎中の身だ。それに金剛十字勲章は君の胸にこそふさわしい」笑みを浮かべたもう１人の将校が言いますね。「では、出撃するとしよう。戻ったら酒でもおごらせてくれ」そして「平和を我が手に！(フリーデン・イン・デア・ハント)」と去っていきます。

１人残されたアインがぽつりと言います。「カイラス……、キミの力、見させてもらおうか」

レキ　：――お疲れさまでした！（笑）

田中　：大丈夫じゃないですか。くるくるとは言わないし……省いた可能性はちょっと高いが。（笑）

GM　：『坊やだからさ』っていうセリフがなかったからマシだと思って。（このセリフは『機動戦士ガンダム』12話『ジオンの脅威』）

田中　：でもそれはまだ、３話か４話先じゃないですか。（注：ちなみに『彼』が死ぬのはガンダムの10話）

シオン　：あれは葬式のシーンじゃないと。

レキ　：お兄さん演説しないと。

シオン　：我々には当然「何を言う！」って言わなきゃいけない船長がいるわけで。（by『機動戦士ガンダム』ブライト・ノア「何を言うか。ザビ家の独裁をもくろむ男が何を言うのか！」）

ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：クリス

GM　：今は、あと半日もすれば合流地点につけるくらいの距離です。フリーデさんの哨戒任務も終わり、皆さん船室に戻っています。突然の爆音と振動が起きます。どうやら帝国の襲撃がはじまったようです。その時、あなたの脳裏にシャードの意思が再び語りかけます。――『巫女よ、ゲイル・ヴァルサーに会うのだ』

クリス　：「ゲイル・ヴァルサー……ゲイル・ヴァルサーがいるの？」

GM　：『会うのだ！』

クリス　：「行かなきゃ！」

シオン　：暴走開始ー。（笑）

GM　：船では「さっきまでは姿もなかったのに何故！？」「でも、現実に襲撃を受けています！　救援を要請しましょう」「だが、まだ半日もかかる距離に」「ですが彼らが本気を出せば……」という話をしていますね。

クリス　：そういうのを聞きながら脇を通り抜けていくわけですね。大騒ぎで誰も気にしないうちに。

シオン　：敵はどう来たの、船で来ていたの？　飛空船団だと終わっているなと思うんだが。

GM　：船で来てます。軍艦ですね。

クリス　：ここはヒロインらしく、敵さんに見つかりやすい甲板に出るわけですな。

GM　：甲板では「救援ボードを出すぞ！　少しでも足が速い奴でゲイルに連絡を入れるんだ！」（笑）

クリス　：おし！　――あ、『おし』っていうのはプレイヤー発言です。（笑）

シオン　：わかってますよー。ちゃんと耳にヒロインイヤーつけておきますんで。

フリーデ：どう考えても、ボートよりわたしの方が早いんだけどね……。

GM　：ですが、船員が行った方が間違いなく認識されます。

シオン　：それに考えてみてください、ボートは戦闘力が少ないですけどあなたは戦闘力のカタマリです。

フリーデ：だから沈められずに目的地に行けるかなと。

GM　：いえ、つまりここで仕事しろと。

フリーデ：わかりました。

GM　：補足しておきますが、ボートで行く場合は乗ってもいいですよ。

クリス　：周りの人に「すいません、ボートってどこですか？」

GM　：目に見えるところにありますね。

田中　：飛び乗れば行ける、みたいなイメージじゃないですか。

クリス　：ＯＫＯＫ。周りを見回して、誰も見ていないわね、みたいな感じで乗ります。えいっと。

田中　：（他のプレイヤーに）乗ります？

レキ　：クリスが乗ったところで登場判定。（ころころ）11とかいってるから出てるな。「クリス、何をしている！」

GM　：と、後ろからあなたは羽交い締めされます。「何をしているんですかレキさん！　あなたはこの船の責任者じゃないですか！」

レキ　：やっぱりそうくる？　そうだろうなと思っていた。

クリス　：「レキさん、ごめんなさい……」って感じで。

GM　：他のプレイヤーはいいんですね？

シオン　：しょーがないなー。（ころころ）出ちゃったよー。「レキさん、僕が行きます！」と、かっこよく乗ればいいんだね。

田中　：いい感じだ。

GM　：彼女が飛び乗り、更に男の子じゃないと飛べないくらいのギリギリで彼が飛び乗ります。

クリス　：いいねー、パズーだねー。
レキ　　：艦の状況とそっちを見比べながら「ええい、くそっ！　シオン、頼む！」
クリス　：ヒロインモードいきまーす。シオンが飛び乗ったところで「シオン君、あなたばかね……！」みたいな感じで。
シオン　：「君を１人で行かせるわけにはいかないじゃないか！」
レキ　　：どうにもならないくらい離れたところで、甲板から「シオン、クリスだけは守り抜けよー！」
シオン　：「でもレキ！　名前叫ぶのよくないんじゃないかー！？」（笑）
GM　　：その時目の前を砲弾がかすめ、ボートと船の間にばしゃんと落ちます。水しぶきが消えた頃にはボートはいない……というところでシーンを切らせていただきます。
田中　　：おー。（何故か全員で拍手）
フリーデ：おつかれさんでーす。

ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：ジール・田中

GM　：戦力差が明確なので、もうホワイトスネイクは降服という形を取るしかないです。で、実は船の護衛の責任者はレキですが、船そのものの責任者はあなたです。
田中　：うそ！？
GM　：艦長は別にいますが、あなたは監督する立場です。ホワイトスネイク船はＧ＝Ｍ社のものですから。
田中　：確かにそうだけど……そこまでだったのか！
レキ　：戦時責任者は私、でも船の運航の責任者はジールさん。
田中　：そうだったのかー。「負けだ負けだ！」とみんなに言う。で、周りには明らかに異常なものがあるのでそれをうまく隠す、もしくは海に落とすように……。あ、アームドギアも落とすか。いつでも《コーリング》（パンツァーリッター1Lv特技。自分のパンツァーを呼ぶ）できるから。（笑）
シオン　：それはあなたは知らないし。
田中　：それで、うちは民間の船だということを主張する。
GM　：そうすると、「では臨検させてもらおう。前もって言っておくが、下手な小細工をすればいつでも沈めることができるんだからな」
フリーデ：今出てもいいですか？
田中　：登場してー。助けてー。
フリーデ：いえ、出てすぐ逃げるだけなんですけどね。
田中　：じゃー出てもしょうがないじゃん！
GM　：難易度８でどうぞ。
フリーデ：（ころころ）出ました。ばたばたしている田中さんのところに「シオン様は？」と駆けつけてきます。「先程から姿が見えないのですが……」
田中　：「それは知らない」――俺は知らないということにしておこう。
レキ　：出ましょう。（ころころ）ちょうど駆けつけてきて「どんな状況ですか？」
田中　：「負け戦だ。時間を稼ぐぞ」
フリーデ：「レキ、シオン様の姿が見えないのです」
シオン　：「シオン君か。さっきゲイルの救援を呼ぶ船に乗っていった」
フリーデ：それを聞いたら、田中さんに「ならばわたしも後を追います。わたしがこの船にいたままでは何かと都合が悪いでしょうし」
GM　：確かに、民間船になんでヴァルキリーがいるんだってことになりますね。
田中　：「裏から……！」と。
フリーデ：「心得ております」とそのまま姿をくらます。「シオン様のアームドギア、よろしくお願い致します」
田中　：「努力はするが、命の方が優先だ」とは言う。
フリーデ：そこは都合良く聞き流して、「では」っていなくなります。
GM　：レキさんとジールさんはどうしますか？
田中　：応対に当たるしかないよね。どうせアレでしょ、向こうからちっちゃな小舟に派手な奴が乗ってくるんでしょう？
GM　：甘いですね。軍艦ごと寄せてきます。（笑）
シオン　：やべ、海賊の手並みだ。
レキ　：物資を隠せるだけ隠してカムフラージュして、戦闘員は戦闘員じゃなさそうな格好にして。
GM　：Ｇ＝Ｍ社とプリムローズは表面上は繋がりがないことなっています。胡散臭いとは思われていますが現時点では証拠が発見されていないので、それを発見されないように努力してください。
シオン　：間違っても、ソフィー・ウィルマーが見つかっちゃダメ。（笑）

レキ　　：私は知りません。シオン君しか会っていません。
シオン　：そしてシオンはソフィー・ウィルマーが誰かは知りません。
田中　　：……まあ、何とかなるだろう。
GM　　：ヒロイン体質というのはこういう時にやっちゃうことを言うんで。
田中　　：くそー、ヒロインは２人もいらねえぜ！
フリーデ：今回は３人です。
シオン　：クラリスとクリスとソフィーですよ。（笑）
フリーデ：１人が１人の足を引っ張るとしても大騒ぎですね。
シオン　：そのうち２人は俺にかかっているってどういうこと？（笑）
GM　　：軍艦が寄ってくるところでシーンを切らせていただきます。
田中　　：一言だけ。――「派手な姿だな」とぼそっと呟いておきます。
GM　　：軍艦は確かに派手ですよ。
田中　　：軍艦自体も派手なのか！　え、でもガルマって紫だよね。（笑）
フリーデ：名前言っちゃったー！

ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク（同行者：クリス）

GM　：ボートに乗った方は全員登場です。
クリス　：シートかぶりながら、「まだでしょうか？」って感じで。
シオン　：「人の目はないみたいだし、出てきてもいいよ」
GM　：クリスさんがごそごそとしている横で、更にごそごそとして出てくる女性の姿が。
フリーデ：本当に２人で片足ずつ引っ張っているんですね。（笑）
シオン　：おい！
GM　：何故ならば、危険から守るべき者は第一優先なわけです。見つかったら間違いなく殺されるわけですから。
シオン　：その意味はよーくわかるんだけど……。はあ。「ソフィー、何をしているんだい？　こんなところで」
クリス　：「シオン君、知り合い？」
シオン　：「ああ、さっき格納庫で会った人。プリムローズの偉い人の娘さんらしいよ」
GM　：「ソフィー・ウィルマーといいます」
クリス　：「ソフィーさん……」
GM　：『ウィルマー』の方にはひっかからないんですね。
クリス　：どうなんだろう、ひっかかるのかな。
GM　：判定してみてください。あなたはプリムローズに詳しいわけじゃないんで目標値12。
クリス　：（ころころ）知らない。「私、クリスっていうんです。よろしく」
フリーデ：今日のダイス目いいねえ。
シオン　：船員に「これゲイルさんへの連絡船だよね。なんであの子まで乗ってるの」
GM　：「万が一のことを考えたら、そうするに決まっているじゃないか」
シオン　：「だって……乗っけてしまったら、民間人ですじゃ通らないよ」
GM　：「彼女は面が割れている」
シオン　：「有名なんだ？」
GM　：「お前知らないのか？　この方はな……」と言ったところでソフィーが割って入ります。「私が誰であろうといいじゃないですか。私が非戦闘員だから、あそこにいても邪魔なだけだっただけです」
シオン　：「ここにいても邪魔じゃないでしょうか……」
GM　：船員の目が殺気立っていますね。
クリス　：そこに「何のお話？」って感じで。
田中　：ヒロイン体質だなー。
GM　：「何にせよ、ゲイルさんに合流するまでに変な行動を取らないでくれよ」
クリス　：「はい」
シオン　：「大体、あの時のレキさんのあの顔見た？　ものすごい形相だったんだよ」
クリス　：「ごめんなさい……」
GM　：「ひょっとしてお２人は恋人同士？」とわけのわからない無邪気な質問。
シオン　：「まさかー！」
クリス　：「何を言っているんですかー」とヒロイン的反応をします。
田中　：……この牧歌的世界を破壊したい。（笑）
GM　：そんな話をしていると、船員の１人が水面を指して「何だありゃ！」
田中　：更に危機なのか！
クリス　：言われて、船先を覗きますが。
GM　：船員が指した先には、海中４～５ｍほどの影が見えます。
シオン　：「クリス、さっき言った通り隠れててよ！　ソフィーさんも非戦闘員なら非戦闘員らしく隠れててください！」

田中　　：魚の質感じゃないかなー、みたいな感じですかね？
GM　　：なんか知らないけど、でかいものが海中にいます。
クリス　：シオン君の言葉を無視して「シオン君、あれ何かしら？」と。
シオン　：「異常事態なんだから座って、クリス。クリスはこういう時に絶対海に落ちちゃうタイプだから」
クリス　：えーっ。それは落ちなきゃいけないということか！
GM　　：だんだん水中から上がってきて、ボートはとうとう転覆してしまいます。ざぱーん。全員が落ちます。――さあ、どっちを救う？（笑）
クリス　：えー、まじで！？
田中　　：確かにそれは正しい。少年が２人を抱えるなど不可能だ。あっぷあっぷってなっている時に君は真ん中にいるわけじゃないですか。（笑）
シオン　：真ん中なんですか？
GM　　：真ん中かどうかはわかりませんが、２人とも会話をしていたわけですから近くにはいますね。
シオン　：全員で落ちたんだね？……一つ聞くけどクリス、泳げないなんてことは……。
クリス　：宮崎溺れで。（笑）
シオン　：一つ聞くけどソフィー、泳げないなんてことは……。
田中　　：『海を見たことないんですよ』って会話があっただろう！（笑）
GM　　：ないです、ないです。作らないでください。
フリーデ：ねつ造大作戦。
GM　　：でも考えてみてください。基本的にこういう少女は泳げません。
フリーデ：ヒロイン属性に『水泳』っていう技能はないですからね。（笑）
GM　　：海の近くとか川の近くとか、水の近くにいない限り泳げないと思った方が正解と思います。補足しておきますが、ソフィーはみんなが助けにいきます。
シオン　：あ、じゃあ……。
田中　　：その中で一番になったらちょっとかっこいいと思わないか？（笑）
シオン　：ここで一番になったら、すっげーかっこいい上においしい。（笑）
フリーデ：いいですよ、そしたらわたしが出てクリス助けますんで、遠慮なくソフィーに行っちゃってください。（笑）
クリス　：いーよいーよ、足でもなんでもつるぞ、おい。（笑）

この後約５分ほど、どちらを助けにいくべきか逡巡するシオン（のＰＬ）。
「さあ助けろ！」って状況下であっさり助けにいくのに気が進まないらしく。
悩むようなところじゃない気もしますが、悩む気持ちもわかります。ＰＬ心理的に。

レキ　　：……なんか、とんでもないところで時間くっている。
GM　　：いや、これは脳内会議なんで、実際は１秒とかかっていない。（笑）
シオン　：わかりました、脳内会議の結果！　すぐにクリスを救いに行こうと思うんですが、皆様よろしいでしょうか。
GM　　：よろしいでーす。（何故か全員拍手）
クリス　：すぐに助けに行くのにそんなに理由づけが必要かい、おい。（笑）
GM　　：自分を納得させる理由が欲しかったんですよ。
シオン　：「クリスー！」ともごもごやりながら行っているわけですよ。
GM　　：フリーデさん、出ていいですよ？
フリーデ：いえ、いいですよ。今はまだ必要とされていないみたいなので。
GM　　：安心してください、そんなあなたのために一ついい情報が。ダブルヒロインのソフィー

さん、みんなが助けに行っているんですが離れているので、結局溺れてしまうでしょう。あなたでなければ間に合わないんです。

フリーデ：……わたしが出てこないと死ぬというなら、出るしかないです。

GM　：じゃ、登場してください。

フリーデ：はい。（ころころ）シオンがいるから普通に出れますね。

GM　：あなたは追いついたところで、船が転覆してシオンがクリスを救いに行ったのが見えます。

フリーデ：ああ、わたしビジョンでいうとね。えーと、シオンがクリスを救ったところでハッとソフィーを見ると、ソフィーさんの手をわたしが掴んで救出している、でいいですか？

GM　：そうすると、更に波が襲いかかってあなたごとざぱーっと波をかぶって、勢いで海にぽちゃん。――そこでシーンを切ります。

フリーデ：はい。あれ、これなら出てこなくても変わらなかった？

シオン　：いや、変わりますよー。

GM　：ちなみに、その巨大な影の正体を確かめることはできませんでした。

ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：ジール・田中（同行者：レキ）

GM　：軍艦がつけられ帝国軍が入ってきます。兵士が「負傷者も含め、全員を甲板に上げろ！」と。

田中　：「それはできない。見ての通り、負傷者は動かしたら死んでしまうかもしれない。それ以外なら全員上げよう」

GM　：「砲撃を受ければどうせ死ぬだろう、構うまい。今、命がある方がマシじゃないのか？」

田中　：でも明らかに、動かしたら死んでしまうような人達が多いはずだから……。

GM　：任されている人間は「お前たちでは話にならない、我が部下を使わせてもらおう。負傷者がいても構わない、甲板に上げてこい！」とだかだかだかと。

シオン　：やべ、トリプルヒロインの最後の１人がなんかやらかす！（笑）

田中　：絶対やるでしょうね。

クリス　：そのための要員でしょう。これもヒロインの宿命ということで。

田中　：１人で十分だよ、ヒロインは！

GM　：ほどなく負傷者も甲板に上げられます。当然ながら負傷者の介護をしているクラリスも上がってきます。ものすごい怒っていますね。「なんでこんなことをするんですか！」

田中　：「クラリス、やめないか。今は言うことを聞くんだ」

GM　：ちょっと涙目になりながら「でも……！」と。これ以上向こうが彼女を挑発するようなことがあったら、何でもやりかねない勢いです。

全員　：……。（溜息）

GM　：みんな、わかっているだろうけど思わないでくれ。

田中　：「君がいなくなったら誰がケガ人を看護するんだ！」と、強くは言う。きちんと。「気持ちはわかるが、これは我々に任せてくれ」

シオン　：やべ、ジール・田中が本気でかっこいい。

田中　：こういう時くらいはかっこよくしないと、ただのスケベ親父になりますから。

GM　：そんなこんなしているうちに、兵士で教育のなっていない人がいるわけですよ。

クリス　：『おらさっさと歩け！』びしっ、みたいな？

フリーデ：『キレーな姉ちゃん、俺たちも診察してくれよォ』じゃないの？

GM　：銃剣の先を負傷兵につきつけて「チンタラやってるんじゃない！」

シオン　：『げひゃひゃひゃひゃ』って笑う奴らですね。

レキ　：「ただの民間船にこんなことをしていいと思っているのか！」

GM　：「お前たちにそんなことを言う権限はない」と言われますが、その言葉に対してクラリスはついにキレます。「負傷者には手を出さないで！　あなた方は人の命を一体何だと思っているんですか！」と一番階級の高い人物に立ちはだかります。ばっ、って感じで。

シオン　：言っちゃったしやっちったしー。

田中　：向こうはどんな反応なんですか。たじっと？

GM　：「勇敢なお嬢さんだなあ、ひゅーひゅー」と。そんなことをしていると船から指揮官らしき人物が出てきます。胸には帝国親衛隊“銀十字軍”のバッチをつけています。どっかの街のゴロツキのようだった兵士は突然びしっとしますね。

田中　：「あなたですか、突然発砲してきたのは。我々は民間の輸送船ですよ」

GM　：あなたには目もくれず、立ちはだかったクラリスに視線を向けて軽く拍手しながら「美しいお嬢さん、とても勇敢だ。あなたにこそ美という言葉はある」と、真顔で言っていますね。

クリス　：もうジールさんぽかーん。

田中　：もう本当にぽかーんですよ。僕は何だったんだ。

GM　：クラリスもさすがにぽかんとしていますけれど「あなたは？」と聞きますね。彼は「おおっと、これは失礼、お嬢さん。私はこの船の指揮官、帝国の銀十字軍」――きらーんとさりげなく光って――「カイラス・グーデリアン少佐である。部下たちが野蛮な真似をしてしまったようだ。本来、私の下でこういうことがあってはならんことなのだが」とキッと隊長の方に目をくれた後「あなたの勇気に免じて負傷者には手を出しません」

クリス　：きらきらーん。

GM　：「こちらに反乱軍の協力者がいるとの情報があってこのような無粋な真似をしてしまいましたが、もし何事もなければこの艦は撤収します」

田中　：「見てもらえばわかるが、我々は別に……」ということを言いますね。

GM　：ジールに向かって目をくれた後「あなたには話していない。このお嬢さんと話しているのだ」と言う。

シオン　：わっかりっやすー。

GM　：「その約束、本当なんですね」と怒った表情は変わらないままながらクラリスが言っていますね。

クリス　：声は島本須美。（注：声優さん。クラリスでナウシカで音無響子さん）

GM　：カイラスは「ええ、お嬢さんとの約束は必ず守ります。ああ、そうだ。先程失礼をしたお詫びも兼ねて、特別に我が船にご招待しようではありませんか。私は強い女性が好きだ。美しければなおのこと」軽く彼女の手を取ってキスしようとしますが、それは拒みます。

田中　：「やめてくれないか！」とは言うけど、何回言っても聞かないだろうから「おーい、おーい……」

フリーデ：哀しい……。

GM　：クラリスは「わかりました。その前に……」と君の元に向かいます。そこで初めて不安げな表情を見せるんだけど、「今は我慢して、お願い。必ずチャンスは来るはずだから」

田中　：ニンジャだから我慢する気満々だけど。「君こそ大変だろうが、医療関係は我々で何とかする。頑張ってこい」

シオン　：今の、意訳するとすごいことになりませんか先生。『ケガ人は面倒見るからカラダ張ってこい』って聞こえるんですが。

田中　：いやいや、食事が彼の条件だということは甲板にいる全員が知っているから。これで行きませんとか言ったらズドンだから。

GM　：「お嬢さん、まだですか？　永久の別れではないのですから。……多分」

田中　：「彼女に何かをしたら我々全員」――多分全員なんだろうけど、男がね――「お前を生きてこの海から返すことはないだろう。命を張ってもな」

GM　：「はっはっは。そういう状況になるのかな。あなたは民間人のはずでしょう。それとも何か……」と言いかけたところでクラリスが「わかりました、行きます」と言います。

レキ　：民間人なめるなよー。

田中　：民間人なめるなよー。税金払わねーぞー！（笑）

GM　：クラリスは離れる際に、あなたに聞こえるくらいの声で「わたしは大丈夫。だって、あなたが助けてくれるんでしょう？」と言って去っていきます。

クリス・シオン：ひゅーひゅー。

レキ　：確実にきましたね。

フリーデ：ひそかに今回の主人公？

田中　：中途半端な主人公はいらないよ！

GM　：カイラスが部下に「では、後の手はずはよろしく頼む」と残して去ります。「さあ、お前ら移動だ」と、あなた方は今度は船底に押し込められます。

ＳＣＥＮＥ　６　シーンプレイヤー：クリス（同行者：シオン、フリーデ）

GM　：ボートで転覆した方々はみんな気絶しています。誰が先に目を覚まします？
フリーデ：わたしかな。機能が戻ったら目を覚ます、という程度なので。
GM　：目を覚ましたらベッドの上です。どこかの船室のようですね。隣のベッドには他にボートに乗っていた人物もいるし、君が助けた人物もいる。マスターであるシオンもいるし。
シオン　：はい！　ヒーローらしく、『クリスの手を離さないでおく』というのはどうでしょう。
クリス　：おお、どうしたんだ？
田中　：どうしたんだ、突然。（笑）
シオン　：だってほら、さっき脳内会議長かったからクリスに悪いことしたなと。（笑）
フリーデ：起きて、周りに人がいるのを確認して。２人が手を繋いでいるのに気づいて、しばらくそれを見つめている。
GM　：そうすると、次第にみんな気がつく。「ここは……？」みたいな感じで、だんだん賑やかになってきますね。
シオン　：じゃ、とりあえずむくっと起きて……。
田中　：いや、ヒロインから起きた方が面白いような気がしないでもないが。
フリーデ：ヒロインから起きて、そこでふっと自分の手を見る、と。（笑）
シオン　：そっちの方が演出的にはＯＫなんで採用！
田中　：はい、脳内会議終了しました。
クリス　：今度は私がさらしもんかい。頑張りまーす。
シオン　：そのうち楽しくなるよ。（笑）
GM　：リプレイ読んだ時に見栄えがするんだから。
田中　：脳内会議を全部削ればねー。
クリス　：目を覚まします。目を覚ますと「あれ、ここは……？」って感じで。起きあがろうとしたら手がひっかかる。「シオン君……」
田中　：強く握っているんですね、向こうが。
クリス　：シオン君が目を覚まさないので「シオン君、シオン君」って感じで一生懸命。
シオン　：そこで起きて、「あ、クリス。無事だったんだね」と。
クリス　：「シオン君、ありがとう……！」
シオン　：「あ、ごめん。手、痛くなかった？」
クリス　：「ううん。あったかかった♥」
田中　：そこまでやらなくても別に……！（笑）
シオン　：「あ、フリーデ。何故ここに」
フリーデ：「（苦笑気味に）それをあなたが聞きますか、シオン様」
シオン　：とりあえずここがどこかはわからないけど、武器みんな持ってる？
GM　：かっぱがれていません。
フリーデ：じゃ、部屋のドアが開くかどうか。開くならかちゃっと開けて外を見ます。
GM　：簡単に開きます。いかつい男がそこにいますね。「おーい、奴ら気がついたぞ、お頭に伝えろ」
シオン　：「『お頭』ということは、海賊のところじゃないんですか？」
クリス　：「じゃあ、ここがゲイルさんの……」
GM　：向こう側から「お頭って呼ぶな、船長と呼べ！」と。
シオン　：ジョニー・デップ（注：ハリウッド俳優。代表作『パイレーツ・オブ・カリビアン』『シザーハンズ』）みたいな海賊が？
GM　：（ルールブックを見せつつ）こんなツラしたおっさんが出てきます。「おお、目覚めたか！」

シオン　：ちょっとかっこいい。
GM　：一緒に船に乗ってた１人が「すいません、ここはゲイルさんの海賊船ですか？」と聞きます。おっさんが「ああ、そうそう。ここだよ。どうした？」と。「それが……！」「まあいい、ちょっと中入らせてくれや」と中に入ってきて「全員息はふき返したみたいだな」と。「ソフィーの嬢ちゃん、こんなところにいたのか。危ねえだろう」「ゲイルさんも元気で……」
クリス　：知らないんだよね、２人とも。
GM　：「他には……」って見渡して見ると、クリスに目が止まります。
クリス　：じゃ、（両手を胸元に組み合わせて）こんな感じで、ここに指輪がきらーんと。「この方がゲイルさん……」って感じで見ている。キャラクターは無意識だけどプレイヤーは意識的。（笑）
GM　：そうすると、ゲイルはクリスの方に驚いた表情で向かってきます。
クリス　：「あの、何か……」
GM　：跪くようにして「まさか、王妃……？　いや違う、まさか……姫様……？」
クリス　：姫様！？
田中　：君はお姫様だったんだね。
クリス　：確か境遇に『失われた記憶』ってあったよなー。
田中　：記憶を探しに旅に出てます、みたいな話じゃなかったっけ。
クリス　：「姫……？　ゲイルさん、どういうことなんです？　私は一体何者なんですか？」
GM　：「いやまさか……しかし……」と向こうも狼狽しています。そこに都合良く、神託が来ます。
田中　：その言い方はちょっと……。
GM　：だって神託ってそういうもんなんだもん！
田中　：いや違う、神託は都合良く来るものだから別にいいんです。
シオン　：だから『都合良く』って言わなくてもいいんですよ。自分を守りたいのはわかるけどさ。（笑）
GM　：ごめん、まだ俺マスターとして若いから。神託はこう語ります。『指輪を見せよ、道は拓かれよう』
クリス　：「私にとって心当たりがあるのは……」とすっと指輪を抜いて、ロード・オブ・ザ・リングばりにさっと差し出します。
GM　：そうすると「これは……！　グリフィンの指輪！」
クリス　：山羊の指輪じゃなくて？（注：『ルパンIII世カリオストロの城』）
GM　：ちゃうちゃう！　かちっと合わせても文字なんか出ない！（注：『カリオストロでの城』では、金と銀の２個の山羊の指輪を合わせるとつなぎ目にゴート文字が出ます）
田中　：あんま下手なこというと当たっていることがあるから、言わないよう心がけないと！
クリス　：ごめん、あたしが悪かった。
GM　：「間違いない。姫、よくぞご無事で」と片膝をついて、あなたに礼を尽くす。
クリス　：「やめてください！　私は……私はまだ自分のことが何もわからないんです。姫とは一体何のことなんですか。そしてあなたは誰なんですか」
GM　：「私は……」と言うと、周りから「お頭、そんなことをしているヒマはねえぜ！」と。「お頭って呼ぶな、船長と呼べ！」と言った後で「確かに、今はこのことを語っているヒマはありません。後で詳しいことをお話します」
田中　：くっそー、またこいつ死ぬのかー。死神の予告はやめてくださいよ。
フリーデ：５分でいいから時間を作ってしゃべろうよ。（笑）
GM　：まわりの人から、船が転覆してどうのこうのという話をゲイルは直接聞いて「そうか……それで合流の時間に来てもいなかったわけか。これは急いだ方がよさそうだな」
田中　：本当に急いでくれよ！

GM　：周りを見回して「安心しろ、奴らは多分まだ無事だ。飛ばすぞ、しっかり捕まっていろ！」と船長室に行きます。
シオン　：「クリス、君は一体……」
クリス　：「わからない、私もわからない……」
GM　：揺れる速度が速くなるわけですが、ボートにいた人達は「姫……？」「確かゲイルって元々どこかの騎士だったって」「すると、そこの国の姫様？」
田中　：『アレが姫様？』
クリス　：アレが、とか言うなー！

ＳＣＥＮＥ　７　シーンプレイヤー：ジール・田中（同行者：レキ）

GM　：君たちも含め、ホワイトスネイクのクルー全員は船底に押し込められています。ホワイトスネイクに残った帝国兵の数は10人×３グループ、全力で戦えば奪還することは可能です。が、みんなのヒロイン、クラリスちゃんが捕らわれの姫様になっています。

シオン　：今、ヒロイン度のＴＯＰを走っていますね。

レキ　：ヒロインLvはかなり高いですね。

GM　：クルーたちは「クラリスが捕らわれている！」「何とかしないと、でもどうするんだ！？」って慌てふためいています。中にはジールに向かって「頼む、クラリスを助けてくれぇ。彼女を失ったら俺たちはこれからどうすればいいんだ！」と懇願する人も。

田中　：そうしたいのはやまやまなんだけど……。「俺は別にヒーローじゃない」とは言うけどね。

GM　：中にはわけもわからない行動をとる者もいて「俺たちの身はどうなってもいいんだ、クラリスだけは……！」

レキ　：とりあえず、周りの様子を探るために見張りをこちらに引きつけて……。安直な方法ではあるけれど、一番取り乱している船員とっつかまえて殴りかかりますよ。

GM　：殴りかかるの？

レキ　：見張りが入ってきたら全員で騒ぐようにとこそこそと言っておいて、監視している人間が『何をしているんだ』と出てきたところで、ジールさんが偵察に行く、みたいな。

田中　：ニンジャっぽくていいですね。

レキ　：まず自分が率先して殴りかかります。

GM　：監視兵が来ますね。「どうした？　もう降参か、精神的にも」

レキ　：仲間内でやっています。「何しやがるー！」どかっ。

GM　：帝国兵も面白がって「面白そうなのがはじまったなー」と浮ついた感じで見ています。

レキ　：だんだんとケンカの輪が広がっていきます。

GM　：「おい待て、いくらなんでも騒ぎすぎだぞ。お前ら捕虜になっているんだから……」

レキ　：「黙って見ていろー！」

GM　：さすがに「おい、応援頼む！　下にいる連中が暴れ出した！」「何だ何だ」と降りてきます。

田中　：その間に隠れて部屋の外に出ます。

GM　：じゃ、【反射】９くらいで行為判定してもらいましょう。

田中　：５以上か……。（ころころ）６、セーフ！

GM　：あなたは兵士の目をかいくぐって、脱出できました。

クリス　：（スーツに頭巾姿のジールさんのイラストを見せつつ）今のジール・田中。（笑）

シオン　：ジール・田中、にんにんバージョン。

レキ　：『パタリロ！』のタマネギみたいだ。

ＳＣＥＮＥ　８　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク

GM　：その後、向こうからの情報によると、ホワイトスネイクは帝国に拿捕されてしまったようです。
シオン　：そっかー、拿捕されちゃったか。ま、しょうがないね。
クリス　：大変だねえ。
GM　：みんな慌てふためいています。「まずい、もしあの兵器が見つかったら……！」「いや大丈夫だ、ジールさんとレキならやってくれるよ」「いや、でも」と。ソフィーさんも青ざめていますね。
シオン　：「どうしたんですか、ソフィーさん？　大丈夫ですよ、レキさんもジールさんもいますから」
GM　：「それでも、あの砲撃を見ているとやっぱり……」
シオン　：「大丈夫でしょう。まだ落ちていないらしいですし」
GM　：「私、怖いんです……」とちょっと泣きが入り始めます。
クリス　：さ、登場判定かなー。（笑）
田中　：ヒロイン対決！
フリーデ：こっちのシーンはひたすらラブコメなんですね。
レキ　：かわいそうだな、シオン。
クリス　：（ころころ）おっけー、余裕っ。「皆さーん、飲み物を持ってきました」（笑）
GM　：ナイスだ。
クリス　：無難にいくべ。
GM　：涙を拭って「ありがとう」と受け取ります。
クリス　：「どうしたんですか、ソフィーさん？　顔色が悪いですよ」
GM　：「ええ……やはり心配で」
クリス　：「大丈夫です。諦めないで」
GM　：「そうですね。諦めちゃだめですね。ありがとう」
シオン　：俺がヒーロー的な行動に出ないようにしたんですね。
クリス　：絡め手で。
GM　：そんなことをしていると、ドアが開いてゲイルが入ってきます。お三方の状況を見てニタニタしながら「よう、そこの少年。両手に花かい？　いいなあ、おじちゃんもそうなってみたいよ」と近づいてきます。「顔は……そうだな、母親似みたいだな。よかったな、あの親父さんに似なくて。がっはっは」
シオン　：「あー、よく言われます」
クリス　：「ゲイルさん、マーカスさんをご存知なんですか？」
GM　：「ちょっとな」
シオン　：「ちょっと？　最近ずっと『ちょっと』でごまかされ続けているんですよ」
GM　：「うん、まあ、多くは語りたくないんだろう。それにこのテの話はもっとじっくり語るものだろう」
シオン　：「じっくりって。わかりやすく端的に言ってくれればそれで済むじゃないですか。父さん、実は犯罪者だったとか？」
GM　：「それはないから安心してくれ。犯罪者に近いことはよくやっていたがな」
シオン　：「父さんって……一体どんな人だったんですか？」
GM　：「我々にとっては友人だな。――もうすぐホワイトスネイクに合流する。戦闘に出れる者は協力してくれ」って、もう１回君を振り返って「君がここにいるということは……任されたということだな」とクリスの方に目をやった後もう一度君に目をやって「姫様をよろしく頼むぞ。死ぬな。女性を泣かすのはいけないことだからな。じゃーな」と出ていきます。そうすると、「野郎ども、順番は逆になったがまずはホワイトスネイクを助けるぞ！　みんな、力を貸せよ！」って声がします。

ＳＣＥＮＥ　９　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）

GM　：海賊船が追いついたところです。船底からは見えませんが、明らかに外の様子がおかしくなります。これぞ海賊船って奴が遠めから相手艦隊にいきなり魚雷を打ち込んできます。

田中　：そのままだとクラリスのいる軍艦も沈んでしまうって奴？

レキ　：音を聞けば大体様子はわかると思うので、残っている監視兵に斬りかかる。

田中　：そこに私が来るイメージで「援軍が来た。しかし彼らはクラリスが向こうにいるのを知らない。俺は……」とみんなを見て「単独でそちらに向かおうと思う」

レキ　：「わかった。こちらを片づけたらすぐに向かう」

GM　：外では派手にドンパチやっています。上からは機銃の音が鳴り響き、下からは魚雷がドコンドコン。

シオン　：すいません、魚雷がドコンドコンならとっくに沈んでいます！

GM　：軍艦といっても１隻ではないんで、護衛艦がまずぼばーん。「これが海賊流のやり方だ！」とか言いながら嬉々として沈めています。

田中　：そちらに行けるよね？　混乱の中、兵隊の姿になりすましてカイラスの軍艦に向かいます。

GM　：そんなことをしている間に、ホワイトスネイクは奪還したと考えてよろしいでしょう。残るは軍艦のみで、ゲイルは攻撃の照準を合わせて攻撃を開始しようとします。「残るはあとデカブツただ１機！　さっさと片づけてしまうぞ！」と。止めめないと落ちちゃうよー。

レキ　：おいらは海賊船の方に走ります。止めに入らないと。「ゲイル、ゲイルはいるか！」

GM　：「第一斉射、用意！」

クリス　：「レキさん……！」あ、登場判定してもいいですか？

GM　：全員、登場していていいですよ。

シオン　：なーんだ、そうならそうと言ってよー。

クリス　：「レキさんどうしたんですか？　ゲイルさんならこっちです」

レキ　：「あの戦艦にはまだ人質が乗っているんだ。ゲイル、早く攻撃を止めろ！」

GM　：「おお、レキ！？　待っていろ、あいつを沈めて最後だ」

レキ　：「今、あの船には人質が乗っている」

GM　：「人質だ？　誰だ！」

レキ　：『誰だ』って……。

GM　：人質といっても千差万別、それによって撃ち方やめの重要度が変わります。

フリーデ：え、そうなの？　『女一人だ？　沈めてしまえ！』って？

GM　：これがね、女の子だと『女のコだ？　撃ち方やめい』とか言うんだよ。（笑）

シオン　：そんなお約束な！

レキ　：「今、あの船には将校が連れていった看護兵が１人、お前たちが到着するまでの時間を稼いでいたんだ。船を潰さないで占拠する方向で何とかならないか！」

シオン／海賊Ａ：「船長、いつでもいけます！」

GM　：「待て、向こうには捕虜がいるらしい」

シオン海賊Ａ：「捕虜？　１人の捕虜で軍艦が沈められるんですよ、問題ないでしょう！」

GM　：「ばかやろう、それがどうやら可愛い女らしいんだ！」

シオン／海賊Ａ：「了解！」（笑）

GM　：「よし！」――その後で「レキ、女の子でよかったんだよな？」

フリーデ：これでブサイクや野郎一匹だったらどうなっていたんだろう？

GM　：すると、向こう側から非常に汚い手を打ってきます。縛りあげられたクラリスがだんと出されますね。

シオン　：すげー……。あんだけかっこいいこと言ってこんなテを使うあたり尊敬できる。

レキ　　：さすが悪。
クリス　：どのツラ下げて縛りあげたんだろう？
GM　　：こんなツラです。（と、サプリメントの挿絵を見せる。わりとかっこいい）
シオン　：あ、前髪くるーができる。
GM　　：後を追うようにカイラスが上がってきて、「ふう、無粋で愚かな真似を……」と髪の毛をふぁさっとやった後で「この勇敢で美しいお嬢さんがどうなってもいいということかな？」と、神経を逆なでするように言います。ホワイトスネイクの一部から悲鳴のような声が。（笑）
田中　　：いい感じだねー。ギャグマンガというよりはハリウッド映画のノリだ。
フリーデ：こいつらと交換するから持ってってくれ、って感じがしますけどね。
GM　　：クラリスが精一杯の声で言います。「撃ってください、私のことはどうでもいいから！」
田中　　：おっ。ヒロイン発言出ましたー。
クリス　：ダメだ、勝てない。このヒロインには勝てない……！（笑）
GM　　：カイラスが皮肉めいた言い方をします。「美しいお嬢さんはこんなことを言っているが、お前たちはそれを踏み台にできるほど心構えができているか？　海賊船が現れた以上、民間船じゃないことは明白だが」
レキ　　：うちが襲われている、ということでどうでしょうか。（笑）
田中　　：私はシーンが一旦変わらない限り出れません。消えたままだから。
シオン　：ここはシーンをカットするのが美しいんじゃないかと。
フリーデ：で、次を田中さんのシーンにして救出すると。
シオン　：いくら田中でも『わかった、お前ごと……』なんて言わないでしょうし。
フリーデ：それでも大丈夫ですよ、《イドゥン》（ホワイトメイジの加護。キャラ一人を復活させる）２枚あるから。
田中　　：それアリ！　木っ端みじんの術。ぼばーん。（笑）
レキ　　：そして《イドゥン》。
GM　　：「あなた方は手をこまねいたまま美しく死んでいくのです。せいぜい美しく語り継がれるでしょう。はっはっは」と勝利に酔いしれた笑いをしています。とりあえずこれでシーンを終わろうかな。
シオン　：はーい。じゃ、次は田中さん。

ＳＣＥＮＥ　１０　シーンプレイヤー：ジール・田中　（同行者：全員）

GM　：ジールさん、ここが最大の見せ場です。
田中　：このゲームはよくわからないが、見せ場にしちゃっていいのかな。
GM　：いいですよ。初めから言ったじゃないですか、影の主役って。かっさらっちゃってください、主役の座！
田中　：えー、いいの？
シオン　：こっちはどうもラブコメヒーローらしいんで。
GM　：続きのシーンからですが、ジールさんは今何をしていますか？
田中　：兵隊の格好をして近くにいますよ。できるだけ近づこうとします。
GM　：味方側の動きはみんな止まっていますね。大将であるカイラスはご満悦です。『俺の力だ！』みたいな。
シオン　：素敵だ。上司としてはかなり素晴らしい。
田中　：悪っぽくていいですね。これが本当のガルマがやっていたら『怯むな、進め！』とかってストーリーにならなかったですね。
GM　：クラリスは「何をしているの、私に構わずやってください！」と訴え続けています。すごく痛々しいですね。
田中　：全然痛々しくないですよ。何故なら、これから俺が救うから！（笑）
GM　：カイラスは完全に優位に立っているから「彼らはあなたを守るため、手を出せずに死んでいくでしょう。あなたにはそれだけの価値がある」クラリスは「あなた……あなたは汚い人です。こんなやり方でしか勝てないんですか？」と言います。さすがに眉をぴくっとひそめて「何……？」と言いますね。クラリスは「こんなやり方でしか勝利を手にできないのなら、あなたは人として最低です！」と。
田中　：うんうん。聞きながら近づいていきます。
GM　：兵の１人が「少佐、準備は整いました」と言うと、カイラスは「わかった。ではもう必要ないな」と、自分の拳銃をクラリスに向けます。「美しいお嬢さん、お時間がきたようです。あなたとの短い時間、非常に楽しませてもらいましたよ。ですがあなたは言ってはいけないことを言った。私が美しくないと……」どうやら『最低』というのを『美しくない』と認識したようです。クラリスは覚悟を決めて「そうです……あなたは醜いです！」
田中　：撃とうとする瞬間に、手裏剣でしゅっと。
GM　：「そうですか……ではさようなら」と、撃とうとするところで――やるんですね。
田中　：手裏剣投げます。
クリス　：かきーん。
シオン　：ここまではビジュアルシーンなんだろうな。
田中　：俺もそう思っているんだけど。３つくらい一緒に投げているようなイメージ。
GM　：一応、命中判定行います。
田中　：不意打ちですか？　こっちが不意打ちだったら《奇襲攻撃》（スカウト1Lv特技、ダメージ+３＆クリティカル率ＵＰ）かけたいです。
GM　：カイラスの周りは兵士たちが囲んでいるので、彼自身に不意打ちをかますことはまず不可能と考えてください。
田中　：えー、不可能なの？　不可能だったら可能にはできないんじゃないですか？
GM　：可能であるとしたら、加護。
田中　：あー……。も、しょうがないや。《ヘイムダル》（スカウトの加護。自分の判定をクリティカル）使おう。
GM　：《ヘイムダル》は自分の行った判定をクリティカルか。それだったら、攻撃当てるより彼女をさらう方がいいよね。
シオン　：さらった方が、さらった後に逃げられます。
田中　：さらおうか。さらう行動をクリティカル。

GM　：《ヘイムダル》消費ということで。じゃ、彼の銃弾が鳴り響いた瞬間、ホワイトスネイクの方々は悲鳴に似た絶叫を上げたんですが、よく見るとクラリスかいない！　どこだ！　と見ると……どこにいます？
田中　：えーと、どこにいた方がおいしいかな？
シオン　：何故か、どこかから吊ってあるロープを持って船へ移っている最中。（笑）
クリス　：おいおい、上、空だぞ。
田中　：海賊船にしよう。海賊船に乗り移ってます。
GM　：クラリスは撃たれた瞬間覚悟を決めて目をつむっていました。目を開けるとあなたが見えるわけですね。「これは夢……？　私、生きているの？」
田中　：「だから言っただろう。私に任せたまえと」……あの、テープ巻き戻してください、『任せろ』と入ってます。（笑）
GM　：「ありがとう」と君の胸元をぎゅっと握ってうつむきます。――人質もいなくなったことだし、ジールさん一言言ってください。
田中　：え……何て言えばいいんだろう。
シオン　：ここは『全砲門、一斉射撃！』なり何なり勝手に言うとか。
レキ　：カイラスに向かって何か言ってみるとか。
田中　：ゲイルに「後は任せた」って言って、彼女を船室の安全なところに一緒にいくイメージで、フェイドアウト。
シオン　：かっこいー、ちくしょー。
クリス　：今日の主役だね。
GM　：ゲイルが「おいしいところとりやがって……野郎共、これで縛るものは何もねえ、反撃はこれからだ！」――で、シーンを変わります。
シオン　：今回はラブコメだ。
フリーデ：ラブコメの魔の手は誰にでも迫っているんですね。
田中　：許せねえ、俺はニンジャだったのに……ニンジャは……うううううっ。

ＳＣＥＮＥ　１１　シーンプレイヤー：クリス　（同行者：全員）

GM　：ゲイルの怒号に近い命令により戦火は口火を切りました。
シオン　：俺も登場？
GM　：全員登場と考えてください。でもジールさんだけは今頃しっぽりと……？（笑）
シオン　：ひどいや、この状況でオトナなことするなんて。
フリーデ：次に出てくる時はお肌つやつや？
シオン　：いや、逆かも。
田中　：そんなことしませんよ！
GM　：海賊とホワイトスネイクは連携をとって帝国と戦うわけですが、海賊が統率された兵士のような動きで帝国軍を圧倒しています。
田中　：ほう。
GM　：どうやら元々海賊はウェストリ騎士だったらしく、整然とされた陣形を組んでいます。
シオン　：やっぱりウェストリ騎士ってロクな奴がいないんじゃ……。
GM　：ゲイルは「俺らがザコをやる。お前はいけすかねえ銀野郎を何とかしてしまえ」
シオン　：要は俺に行って戦艦落としてこいと。どこにいるんだ、銀野郎。
GM　：戦艦というか、奴らのトップを落とせと。「お前がマーカスが譲り受けたものなら簡単だろう。ケツは俺らが持つ」と、ゲイルは的確に指示しながら、船首のラムを軍艦に衝突させるコースを取ります。
シオン　：結局、本当に八艘飛びさせられるのか。
クリス　：がんばれー。
シオン　：船首のギリギリ辺りから、ぶつかる瞬間に飛び移ればいいわけですね。
GM　：シーンプレイヤーのクリスさんはどうしますか？
クリス　：……ここ私のシーンか。そうだった。
GM　：ゲイルさんは「貴女は今ここにいるべき方ではありません。安全なところへ」と下がらせようとします。
クリス　：でもここで下がったら今までの苦労が水の泡では。
レキ　：レキも言いますよ。「クリス、あなたはケガをしてはいけないから、奥に下がっていてくれ」
クリス　：どうしようかなー。「でも、みんなが……みんなが！」って感じで。
レキ　：「皆は、あなたを守るために戦っている！」
GM　：「お連れしろ」と海賊の１人が強引に連れていこうとします。
クリス　：ええー！
GM　：そして、ゲイルの姿が見えなくなると同時に……啓示なんでしょうかかね、倒れて血を流しているゲイルのビジョンが！
クリス　：わー。それでハッとして「離して！」と。――それとも、「離しなさい」の方がいいですか。
田中　：「離して」でいいんじゃない？　まだ目覚めていないということで。
レキ　：目覚めてないって何に目覚めてないんだろう。
フリーデ：姫に。（笑）
クリス　：ぱっと振りほどいてゲイルのところに走っていきます。
GM　：「姫！」って言われながら走っていくわけですね。走ったと同時に船首が戦艦にぶつかります。

ＳＣＥＮＥ　１２　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：全員）

GM　：海賊船がカイラスの軍艦にくらいつきます。ホワイトスネイクの船員も押し返す形で相手の軍艦に乗り込みます。ゲイルさんも先陣を切って突っ込んでいきます。
レキ　：その前にゲイルを引き止めます。
GM　：「レキ、久しぶりじゃねえか。この戦いに勝ったら酒でも酌み交わそうぜ、はっはっは」
クリス　：ぐっ。
レキ　：その前にクリスの話でしょ。「ゲイル、お前はクリスという子を見て思わなかったか？」
GM　：「まさか、生きておられたとはな」
レキ　：「本人はまだ何も覚えていないらしい。しかしあの指輪と面影は確かに……」
GM　：「後で、彼女の生い立ちから全て伝えねばなるまい」と言いながら戦っています。がんがんがん。
レキ　：背中合わせになりながら会話しつつ戦っているわけですね。
GM　：「何にせよ、そういう込み入った話はまた後でな！」
レキ　：「そうだな、これを早く片づけて酒でも飲みながら話すか」
田中　：あ、きたっ。死亡第一フラグ立ちました。
シオン　：これは２人のうちどっちかだ！（笑）
GM　：「俺の首は軽くねえぞ！」と言って向こうへ。
シオン　：やべっ、向こうにフラグ立った！　このままじゃおいしいところ取られますよ？
田中　：負けるな、もっとフラグを！
レキ　：ええっ、こっちが死ぬフラグ？（笑）
シオン　：私、まだ２回目の戦闘なので、島の子供らしくうろたえながら剣を振っています。
田中　：それもかっこいいじゃないですか。
GM　：あなたはシャードに選ばれているけど、パンピーに限りなく近い。武装は持たされているけどヘタレ。
フリーデ：わたし、そこにいていいんですよね？
GM　：というか、いてくれないと困ります。当然ながら波状のように兵士が襲いかかってきます。「奴は弱そうだー！」
クリス　：あれね、ＳＬＧだと真っ先にカーソル合わせられる奴。（笑）
GM　：無数の剣がシオンに降り注ぐ。
フリーデ：それはわたしが端から弾く。「シオン様はわたしから離れないでください」
シオン　：「ぼ……僕だって戦える！」……はず。
フリーデ：それに対してはあえて反対も何もしなくて、ただシオンが気持ちよく戦えるような形でサポート。（笑）
レキ　：まさにサポートだ。
シオン　：それは逆に、どんなにシオンが活躍しても全部フリーデさんの手柄になってしまうという。
田中　：わざと殺さないで他を傷つけるんですよね。
クリス　：ほら、トドメを刺せば経験点がいっぱいもらえるよ。（笑）
シオン　：聞けば聞くほどシオンが情けない。俺、まるでファイアーエンブレム（注：往年のシミュレーションゲーム。以下同）のキャラクターですね。
クリス　：シャイニングフォースでもいいし。
田中　：ロボット大戦でもいいですけどね。
GM　：そんな感じでいると、君の目の前にカイラスが。何人かの護衛を引き連れて撤退しようとしています。

シオン　：島の子供としては、卑怯に後ろから銃を撃つと。
GM　：むしろ行けや。
田中　：いや、それでもいいんだ。
GM　：届きませんけどね。
シオン　：ガンブレード、50m届くよ。
GM　：肉の壁とかある。それに、追ってくれとゲイルに頼まれています。
シオン　：追いかけるだけ追いかけよう。
田中　：普通に走って追いかけるだけではだめなんですよ？　もっとなんかこう知恵を使いなさい、知恵を！

ＳＣＥＮＥ　１３　シーンプレイヤー：クリス

GM　：追っ手を追い払い戦場に出ました。そりゃエライことになってます。
クリス　：ちょっと青ざめながらゲイルの姿を探します。
GM　：ゲイルさんは猛威をふるっています。ちぎっては投げ、ちぎっては投げ。
クリス　：すげー。ここはヒロインらしく「ゲイルさん！」ってところで兵士がばーっと来るんでしょうか。
田中　：そこに出ましょう。
GM　：登場判定６ぐらいですね、ジールさんよろしくお願いします。
田中　：（ころころ）出ました。「危ない！」とかって。
シオン　：黒頭巾にスーツ姿かと。
クリス　：「ジ……ジールさん、その格好は……」（笑）
GM　：決定づけられてしまった。（笑）
田中　：これが俺の戦闘服だ！
クリス　：この格好でジールだってわかるのもすごいよね。
田中　：だって眼鏡しているじゃないですか。――あんたが描いたんじゃん！　俺、あの眼鏡がなかったらこんなことしなかったよー。
GM　：オフィシャル決定。
クリス　：ごめんよー、ほんの軽い気持ちだったんだよー。
GM　：ゲイルさんの姿がまた見づらくなりますね。奥に向かったようです。
クリス　：「ジールさん、大変なんです。ゲイルさんが……！」
田中　：「多分、向こうの方だ。向かうぞ！」
GM　：……というところでシーンを切りましょうか。

ＳＣＥＮＥ　１４　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：全員）

シオン　：また俺かい。
GM　：ちなみに全員参加です。次でクライマックスフェイズにいきますね。
シオン　：私、『シャードに選ばれた理由』を考えるヒマが全くなかったんですが、どうすればいいんでしょう。
GM　：知らん！
クリス　：（小声で）ゲイル、ゲイルが死ぬ時！
フリーデ：でもまだ死ぬと決まったわけでは……。（笑）
GM　：シオン君はカイラスを見失わずに追いつめることに成功します。
フリーデ：私は斜め後ろに控える感じで。
シオン　：「追いつめたぞ、そこのひと！」
GM　：明らかにカイラスの侍らせている兵は少ないです。だけどカイラスはまだ余裕の笑みを浮かべています。
シオン　：「さっさと投降しろ。僕たちはお前と違って卑怯な真似はしない」
GM　：「この私を追いつめたつもりか、それで？」
シオン　：「この状況下で追いつめた以外の何があるというんだ」
GM　：「ふっ……ふはははは……ははははは」と笑いながら「君たちはこれだからなっていない。せいぜい醜く死んでいくがいいさ」
シオン　：「お前こそ、うちの家政婦の戦闘力をなめるな！」
クリス　：家政婦か！
フリーデ：じゃ、一歩前に出ましょうか。
GM　：そうすると、「これだから戦術がなっていない奴らは簡単なのだ」と言って手を上げる。あなた方の真後ろから大量の砲火が。フリーデさんは前にいるんで、彼を防ぐことは不可能です。
フリーデ：今すぐ行動しても？
GM　：無理ですね。そうすると、シオンを覆う影が。あなたは銃弾を無傷で回避することができました。
シオン　：「フ、フリーデ？」と。
フリーデ：わたしも、何が起きたのか把握しきれなくて呆然としています。
GM　：あなたをかばって崩れた影は、ゲイル。
田中　：おいおい。
フリーデ：またこのパターンか！　２話連続でＮＰＣ踏み台にして生きのびているよー。
田中　：違う違う、多分ね、３話目も４話目も５話目も……。（笑）
GM　：ゲイルは最後の力を振り絞ってアックスをトマホークのように投げ、相手を薙ぎ払います。それが最期の力です。彼は崩れ落ちます。
レキ　：そこに間に合うでしょうか。
GM　：ああ、あなた方はみんな間に合ってもいいです。
クリス　：「ゲイルさーん！」
シオン　：俺はやっぱりここで「海賊のおじさん……」
GM　：「おじさんって呼ぶんじゃねえ……」と、強がりは言っていますが明らかに致命傷です。出血量がシャレになっていません。
シオン　：「なんで……」
GM　：「これは……お前らを守るための戦いだ。そんな顔するな。俺にも昔、お前くらいの息子がいたんだ。あの時は守ってやれなかった。国が滅んだ時、俺はあいつを守ってやることが……できなかった……」血を吐きながら言いますね。
シオン　：「ゲイルさん……ありがとう」

GM　：「俺には構うな。さっさと奴の首を取れ！」
シオン　：「わかった！」と言って、《コーリング》（パンツァーリッター1Lv特技。自分のパンツァーを呼ぶ）します。
田中　：おおー。
GM　：曲玉の耳飾りがきらーんと光って、格納庫からアームドギアが扉をこじ開けるように現れ、君の元にずーんとジャンプしてきます。
シオン　：そのまま、無言で走り込んでいきます。
GM　：さすがにカイラスも表情が変わりますね。「くっ……ならば。お前たちはここを死守しろ！」と、兵に命令を下して去っていきます。あなた方は帝国強化兵に囲まれます。戦闘フェイズに入ります。
シオン　：――あ、シーン変わる前に《イドゥン》（ホワイトメイジの加護。そのシーン内に死んだキャラ一人を復活させる）使わないと、ゲイル死んじゃうよ？
クリス　：あー……。でも、助けちゃって大丈夫かな？
GM　：でもここで使っちゃうと、他のプレイヤーが死んだ時にどうなるの、という。
フリーデ：でも《イドゥン》、私も持ってますからね。
クリス　：それもあるし、《フレイ》（オラクルの加護。加護ひとつをコピーして使用）もまだあるしね。
フリーデ：使っていいんじゃないかなあ。いっつも《イドゥン》残るから。
シオン　：いつもフラグ立った奴見捨てるのもねえ……。この豪放磊落なおっちゃんくらいは生き残らせたいなと。やっぱこういうおっちゃんは包帯だらけでゲハゲハ笑って「生き残っちゃったよー」みたいなのがいいんじゃないかと。
田中　：いいんじゃないですか。
クリス　：いいですか？　じゃ、使わせていただきます。駆けつけ《イドゥン》。
シオン　：《イドゥン》をかける前に何かあれば！
クリス　：じゃ、「ゲイルさん！　……死なせはしない！」と、演出的にオーラみたいなのが出て、《イドゥン》。
シオン　：みんなが賛成したわけだから、自分が死んでも文句はないと。
クリス　：ええー！？
田中　：ちなみに自分は死にません。他の人は死ぬかもしれないけど。
シオン　：俺も、いざとなったら《ヘルモード》（パンツァーリッターの加護。シーン内のどこでも移動でき、防御をクリティカルにできる）。
フリーデ：私も《ティール》（ハンターの加護。自分の受ける実ダメージを０にする）ありますし。
クリス　：いざとなったら《オーディン》（ブラックマジシャンの加護。加護ひとつをうち消す）で。
レキ　：俺だけか。その時は自分がくらって《タケミカヅチ》（サムライの加護。自分の受けたダメージを相手にも同時に与える）で相手を殺すから。

【クライマックスフェイズ】

ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）

シオン　：俺も参加するの？
GM　：うん、だってこいつらに阻まれたんだもん。
田中　：こいつをやっつけないと先に進めないんですよ。

■戦闘Ｉ　VS 帝国強化兵（モブ）４人×２グループ■

［行動順］ 行動値10　レキ
行動値９　フリーデ　ジール・田中　クリス
行動値７　シオン
行動値なし モブの帝国強化兵（４人×２グループ）

レキ　：斬りつけにいきまーす。普通に（ころころ）【命中】15といって斬りました。
GM　：【回避】（ころころ）――くらいました、どうぞ。
レキ　：《両手持ち》（サムライ２Lv特技。武器の攻撃力＋３）にします。とりゃ。（ころころ）う、２だ。えーと、〈斬〉の15。
GM　：今ので１体倒れましたが、まだ残っています。
レキ　：今はお試しでやってみたんですが、結構固いな。
GM　：やべ、戦闘力はかられている！
フリーデ：《ガトリングガン》（ヴァルキリー専用武器）でいきまーす。［範囲：選択］なので２対象。（ころころ）あ、低っ、12。どうしようもないっす。
GM　：（ころころ）さすがに強化された兵士、華麗に避けました。
田中　：12で当たらないのか。それだったらキャノン（正式名称は《ＧＣ－ＸＸ携帯型キャノン》。エージェント1Lvの取得アイテム。〈刺〉＋５の携帯火器）で攻撃しないとだめですね。１体倒れてる方に、たー。（ころころ）えーと、15だわ。
GM　：（ころころ）ごめんなさい、クリットしました。

……というちまちましたやりとりの中、加護を使わない地道な戦闘は続きます。
根気よくダメージを重ね、３Ｒ目のジールさんの攻撃でようやくトドメ。

GM　：落ちました。
シオン　：さて、ザコは払った、次！
フリーデ：次は何がくるのかな。

ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：なし　（全員登場）

GM　：あなた方は船尾に向かいますが、カイラスの姿が見えません。
シオン　：……ふと思ったんですが、このまま船沈めたら終わりなんじゃないですか？
GM　：かもしれませんね。
レキ　：ちゃんと船にいてくれれば。
GM　：いなくても、船を沈めたら勝利ですね。
フリーデ：じゃ、撤退して、魚雷を一発撃ち込んでもらって……。
シオン　：それで終わりっちゃ終わりなんですが、私にはあの遺言のような「カイラスを追え」という言葉が……。
GM　：ということを言っていると、船からの攻撃じゃないものがシオンに降り注ぎます。見ると、離れた海上に見慣れないゲパルド・ギアが。出ました水陸両用！
田中　：ごめん、最初に言ってしまったよー。
シオン　：『大海の決戦』っていった時から出るのは決まっていたんですよ。
GM　：俺もなんでこんなん出るんだとか思いましたよ。ごめんねー。カイラスは勝ち誇ったように「これが我が軍の最新鋭、水陸両用用のゲパルド・ギアだ！　そう、もちろんこの私専用のな！」
田中　：紫色だ。
GM　：紫だと思ってくれていいです。シオンは20点の〈刺〉をくらってください。
シオン　：どがーん。いきなりイベントでそれかい。15点きて、ＨＰ残り12点。
田中　：装甲５点もあるの？　さすがアームドギア。
シオン　：実はプロテクターの方が厚いんです。プロテクターが３点でアームドギアが２点。
GM　：アームドギアはレベルが上がらないとどうにもなりません。上がっていけばえらい上がります。
シオン　：マスター、そうは言うけどさ……。
GM　：言うな。パンツァーリッター普通に上げた方が高いとか言うな。
シオン　：何回調べても、アームドギア上げても強くならないんです。アームドギア上げるくらいだったらファイター上げるわ。
GM　：でも、アームドギア上げないとお話としてどうにもならない。

とかアームドギアの弱さを語りながらも、今回のラスト戦闘、開始です。

■戦闘II　VS 帝国親衛隊“銀十字軍”カイラス・グーデリアン少佐■

［行動順］行動値18　カイラス
行動値10　レキ
行動値９　ジール・田中　クリス　フリーデ
行動値７　シオン

シオン　：向こうが寄ってくるまで、俺、何もできません。
田中　：飛べるんだろ？
シオン　：９レベルになればね。
フリーデ：遠いなあ。
シオン　：そんな経験値ないぞ。いや、あるかもしれないけど、勿体ない。
田中　：なんか戦う方法ないんですか、レーザービームとか出せないんですか！
シオン　：砲弾は500ｍまで届きます。
田中　：じゃー大丈夫じゃん。戦えよ！　こっち小型だから25ｍしか届かない。
GM　：「お前たちには水中で戦う武装などあるまい！　無様に散るといい！」いきまーす、《サンダークラック》（ブラックマジシャンLv６特技。〈雷〉５Ｄ６ダメージ）。［範

囲（選択）］で全員に攻撃です。（ころころ）。［範囲（選択）］で全員に攻撃です。（ころころ）17で【抗魔】してください。
シオン　：【抗魔】17？（注：ＰＣ側の【抗魔】は５～７程度。ここに2d6を足して回避値を出します）　出るわけないじゃん！（ころころ）あ、クリティカルで出た。
田中　：（ころころ）14、だめだ。
フリーデ：（ころころ）わ、１・２だって。ください。
レキ　：（ころころ）14。
クリス　：（ころころ）だめだよー。
GM　：いっきまーす、ダメージ！（ころころ）15点の〈雷〉。ちなみに今の攻撃は効果範囲20ｍなので、それくらいの距離にいると考えてください。相手は海の上に出ています。……次、レキさんどうします？
レキ　：届かない。――行動を遅らせます。
フリーデ：わたしは普通に飛んでいって攻撃をかけます。《ディスチャージ》（ヴァルキリー1Lv特技。武器属性を〈雷〉にする）して、【命中】は（ころころ）３出たから、11。低いなー。
GM　：（ころころ）回避です。
フリーデ：これで回避しなかったらどうかと思いますよね。
田中　：次、俺ですね。キャノンで普通に攻撃しますよ。隠れられないだろうしな。（ころころ）低いでーす。13。
GM　：物理攻撃ですね。（ころころ）回避しました。
クリス　：私、シオンに《エンチャントウエポン》（ホワイトメイジ1Lv特技。物理ダメージを＋２）。（光線照射ポーズを取りつつ）びーっ。
GM　：わー、スペシウム光線だー。
シオン　：（ころころ）うん、低いぞ。13といって命中しかけているぞ。
GM　：（ころころ）すい～っ。まるで水面を泳ぐかっぱのようにすいんすいん。
田中　：どんな感じなんですか。形見せてくださいよ。
GM　：（挿絵を見せつつ）こんな感じ。ポケットに出てきたハイゴックと思えば。（by『機動戦士ガンダム0080・ポケットの中の戦争』。水陸両用のモビルスーツ）
シオン　：……水陸両用の方がかっこよくないですか？
GM　：カイラスは非常にご満悦で、「これをただのゲパルド・ギアと思うと痛い目に遭うぞ！」
シオン　：かっぱだからね。
GM　：「何ーっ？」と怒りだしますね。「かっぱだと？　貴様……この我が愛機をいうにことかいてかっぱなどとは、許さん！」とシオン一人に攻撃ー。
フリーデ：こーゆー時って、会話通じちゃうんだよね。
GM　：（ころころ）26。回避してください。
シオン　：ふざけんな。６ゾロが出るかどうかだけが楽しみだ。（ころころ）はーい、ダメージ出しー。
GM　：《トール》（加護。ダメージロールに＋10Ｄ６）。ジャンプして跳ね上がって、君にのみ集中砲火という形でいきます。
フリーデ：これはくらっておいた方がいいですね。
シオン　：普通にくらいますよ。演出次第ではかっこよくブレイクします。
GM　：（ごろごろごろ）56の〈神〉ダメージをくらってください。ずばばばば、と周囲込みで蜂の巣になります。
シオン　：ブレイク。
フリーデ：「シオン様ー！」
クリス　：「シオンさーん！」

レキ　　：「シオーン！」
GM　　：信じられないことに、あなたは致命的なダメージは受けていません。……ブレイクしたからね。
クリス　：『何い、これをくらってまだ起きあがるとは！』って感じ？
GM　　：そんな感じ。

レキは海上の敵に接敵できず、他のＰＣの攻撃も当たりません。
それでも、ジール・田中の一撃にシオンが《トール》を重ねるなど、
必死の戦いが続きます。

田中　　：（ごろごろごろ）34の〈神〉です。
GM　　：さすがに、ちょっとダメージくらいましたね。
シオン　：『ちょっと』？
GM　　：同時に、あなたにも弾幕の〈神〉ダメージが降り注ぎます。《タケミカヅチ》（加護。自分の受けたダメージを相手にも同時に与える）、34点。
田中　　：ブレイクー。
GM　　：「奴か、スーツケースのミサイルでゲパルド・ギアを屠ったという報告のある男は！」
田中　　：「知らんな」と言っておこう。
GM　　：「だが、この程度では私は倒せん！」

そんな感じでの３ラウンド目の冒頭。
シオンとジールは既にブレイク、他のＰＣもいい具合にダメージをくらってます。

レキ　　：「貴様の美しさとはそうやって逃げ回ることか！」ぐらい言ってみましょうか。（←相手が遠いのでできることがない）
GM　　：さすがにビキビキときたらしく「もういい、貴様らは死ね！」と攻撃かまします。《サンダークラック》（ブラックマジシャンLv６特技。〈雷〉５Ｄ６ダメージ）いきまーす。
シオン　：俺は避けれなかったら《ヘルモード》（パンツァーリッターの加護。シーン内のどこでも移動でき、防御をクリティカルにできる）。
田中　　：俺は避けれなかったら……どうしたらいいの？　《エーギル》（エージェントの加護。対象の判定をファンブルに変更させる）で失敗させようか。
シオン　：いや、くらってカウンターの方がいいと思う。
GM　　：（ころころ）【魔導値】の16です。
クリス　：（ころころ）おっけー、避けた！
フリーデ：（ころころ）避けたよー。リアクション有利ですよね。
田中　　：（ころころ）あ、だめだった、やっぱり。
フリーデ：ジールさんが受けるダメージはわたしが《カバーリング》（ハンターLv1特技。他人をかばう）します。
シオン　：（ころころ）避けない、１点足りない。《ヘルモード》（パンツァーリッターの加護。シーン内のどこでも移動でき、防御をクリティカルにできる）で回避しました。
GM　　：ダメージには、更に《トール》（ファイターの加護。ダメージロールに＋10Ｄ６）いきまーす。
田中　　：がーん。
クリス　：そこに《オーディン》（ブラックマジシャンの加護。加護ひとつをうち消す）かける？
シオン　：いや、しなくていい。

レキ　：相手の攻撃にもう１枚《トール》（ファイターの加護。ダメージロールに＋10Ｄ６）をかけます。もう10Ｄ６してください。
GM　：えええ、何それ！　なんでそんな第２話でこんなこと……。
レキ　：え、これは《タケミカヅチ》（サムライの加護。自分の受けたダメージを相手にも同時に与える）持っている人間の宿命。
シオン　：雷を全て剣に集めて叩き斬るんですよ。
レキ　：そうですね。うりゃーっ。びりびりびり。
クリス　：空が何故か暗くなって。
田中　：艦内の電気がびびびびびと。
フリーデ：海面がざざざざさーっと。
シオン　：かっこいい、レキさん！　いつでも半死半生だ！
GM　：20Ｄ６？　（ごろごろごろ……）まず、レキさんに88点のダメージがいきます。
レキ　：半死半生だー。《タケミカヅチ》、88点相打ちでございます。「やっと出できやがったな、それを待っていた！」
GM　：今、場に何が出たっけ？（←《フレイ》（加護。シーン内に出た加護ひとつをコピーして使用）を使おうとしている模様）
レキ　：《トール》、《タケミカヅチ》、《ヘルモード》。
シオン　：《ヘルモード》はダメージが確定しているので使えません。回避に使うものなので。
フリーデ：《ティール》（ハンターの加護。自分の受ける実ダメージを０にする）使ってなくってよかった。
GM　：どうしようかな……破壊的なダメージをくらって死にかけますが「ならば！」とシオンに《フレイ》で《タケミカヅチ》。
シオン　：できません。《タケミカヅチ》でくらった実ダメージを《タケミカヅチ》で返すのは不可能です。
GM　：不可能ですか。じゃ、どうしましょうかね……なら、爆発の中でシオンにしがみつきます。「ならばせめて……この場で醜態をさらすぐらいならこいつを！」と《自爆》（クリーチャー用特技。［戦闘不能］or死亡時に〈炎〉３Ｄ６ダメージ）をかまします。
田中　：すごい執念だ。
GM　：これで水陸両用ゲパルド・ギアの機密も保持でき、相手の最新兵器も屠れて自分の死に誉れがつく。その《自爆》に《フレイ》で《トール》。
フリーデ：それ、《カバーリング》でもらっちゃっていいですか？　「この方は絶対に死なせません！」って……引きはがすでいいのかな。
田中　：それは今までにないヴァルキリーの力で。
GM　：「何い！」と、それでも執拗にしがみつこうとしますが、そこはあなたの力でねじ曲げで何とかなったということで。（ころころ）40の〈神〉ダメージです。
フリーデ：《ティール》で消します。爆発の直前で自分だけ避ける、みたいな。
GM　：同時に船から「動力炉を破壊したぞ、みんな逃げろ！」という声が聞こえますね。
クリス　：どうやって逃げよう？
シオン　：「みんな捕まって！」って言って僕が走りましょう。
GM　：難易度判定、16。
シオン　：わあお。素敵なことを言いだしましたね。
GM　：何言っているんです。《ヘルモード》あるでしょう。
シオン　：さっき使いました。
田中　：わかりましたよ、使わせればいいんでしょう。「君ならできる、大丈夫だ」《ツクヨミ》（ニンジャの加護。他人の加護を使用させる）～。
クリス　：今すごい棒読みだった。（笑）

GM　：その時、回復したとはいえまだ傷を負っているある人物の声が聞こえますね。「こっちだ、こい、飛べ！」
シオン　：飛びまーす。みんな捕まっているよね。
フリーデ：私は付きそう感じで、すぐ隣に。
シオン　：《ヘルモード》～。
GM　：君たちが無事脱出したた瞬間、さっきまで戦闘していた場所が爆発します。ちょうど動力炉は真下辺りだったんですね。

【エンディングフェイズ】

ＳＣＥＮＥ　１　シーンプレイヤー：シオン・シュタゥク　（同行者：クリス、フリーデ）

GM　：登場判定は難易度８ですが、クリスさんは自動成功なので出ていてください。
フリーデ：わたし、登場してて後ろから見ているっていうのはアリですか？
GM　：あ、登場してＯＫです。
フリーデ：はい。後ろにいます。いるだけですけど。
GM　：あの後、ゲイルは、君たちが無事脱出を果たした瞬間にまた倒れたんで、医務室に運ばれています。
クリス　：無理をしていたんだね。
GM　：医務室ではクラリスに叱られるゲイルさんがいます。「一命を取り留めたからいいようなものの、重傷には変わりないんですからね、大人しくしていてください」
田中　：さすがヒロイン。
クリス　：ヒロインかー……。（しみじみ）
GM　：ゲイルさんはそんなものはものともせずに豪快に笑って「気にすんな気にすんな」
シオン　：「気にしますよ！　あなたは確かに僕を救ってくれたかもしれませんけど、救われた方の身にもなってください」
GM　：「悪かったな。かえって俺の想いを背負わせるような真似になりかけたわけだしな」
シオン　：「これ以上、命を賭けたものなど背負いたくないです。こんな形見ひとつ渡されて機械に乗れなんて言われて……！」
GM　：「そうだな。勝手に人に思いを託すのは簡単だよな。今後は控えるよ」
シオン　：「卑怯です。自分だけ気分よく死なれたらたまったものじゃありません」
GM　：「まあ、でも、撃たれた気持ちはよくないぞ」
シオン　：「笑い事じゃないですよ！　死なないでください、勝手に。そんな……全然、運命にあらがってないじゃないですか！」
GM　：「そうだな。でもこれで、お前が頼りになることがわかった。その調子で……」とクリスの方を見て「姫様をよろしく頼むな。お前の親父さんたちが託そうとしたものだ。お前が守ってやってくれ」
シオン　：「ひとついいですか？　姫様姫様って、クリス、どこの姫様なんですか？」
クリス　：「私もさっぱり……『姫様』と呼ばれて姫様らしいのはわかったんですが……」
シオン　：「そもそもうちの父さん、一体どこの犯罪者なの」
GM　：「あれでも失われた王国の技術者だったんだぞ」
シオン　：「ということは、あなたもその王国の人？」
GM　：「まあ、そういうふうには見えないだろうがな」とけらけら笑っています。
シオン　：「せいぜい山賊の頭とか……」
GM　：「ああ、その辺くらいがちょうどいいかもな、っておい。それは言い過ぎだろう。せめて海賊と呼べ！」
シオン　：「賊の頭がせいぜい……」
フリーデ：それは口を挟みます。「――シオン様。話が前後しすぎていませんか？」
シオン　：「あ、そうそう。父さんが一体どこの……なくなった王国？」
クリス　：「それは、私がいたところなんですか」
GM　：「そのことで姫様、あんたに話がある」というところでシーンを切ります。

ＳＣＥＮＥ　２　シーンプレイヤー：クリス

GM　：ゲイルは「話がある」と言った後で「悪いが、彼女と２人だけで話がしたいんで席を外してくれないか」と言います。クラリスさんもいなくなり、本当に２人きりです。完全に２人であることを確認すると、ゲイルは今まで黙ってた口を初めて開きます。「驚かないで聞いてください。貴女は幼い頃の王国の記憶をお持ちでない。ですから、これから貴女のことを語ります」

クリス　：「お願いします」

GM　：「まず、貴女はウェストリ王国の王位継承権を持った姫です」

クリス　：「そんな……ウェストリ王国ですって？」

GM　：現在ではウェストリ廃王国と呼ばれる、過去に王国があった場所があります。古代文明で栄えていた国だったんですが帝国に攻め滅ぼされた、という。現在、王位継承権のあるダーモット王子が領主連合に亡命をはかり、一応無事なんですが……。

シオン　：そこで勝手に亡命政府を作って。

GM　：しかも、周りから見ると何やっているんだこのおっさんは、くらいの使えなさぶりらしいです。逆に憎めない部分もあるり、しょうがないから放っておけ、くらいの位置づけらしいです。

フリーデ：彼も指輪を持っているんだよね？

シオン　：獅子の指輪を。

GM　：「貴女がお持ちであるその指輪はある秘密がありまして……」

クリス　：２つ合わせて、かちーん。

田中　：あの、あまりいろいろしないように。どれかに当たっちゃうから。（笑）

GM　：「その指輪は王位継承権の証です。つまり、貴女は王位継承権をお持ちです」

クリス　：「私が王位継承権を持っているなんて……」

GM　：「マーカスが貴女に託したということは、貴女が王位を継承する存在だと認めたということです」

シオン　：ここで重要なのは、ダーモット王子がウェストリ王国第二王位継承者ということです。

GM　：これからゲイルさんも説明しますけど、「貴女は第一継承権を持つ王妃の娘です」――つまり、継承権はダーモット王子より高いです。

フリーデ：まず直系にいくんだね。男女関係なしに。

シオン　：現状で言うとあなたが一番。なお、あなたの兄上が現れた場合が兄上が一番。

クリス　：おお、そういえば兄もいたんだっけ。

GM　：「あのバーサーカーの暴走事故で貴女は生死不明になっておられましたが、まさかこういう形で再びお目にかかれるとは……」

クリス　：「私もこんな形で自分の出生を知るなんて……」ここで兄の存在を思い出していいですか？

GM　：いいですよ。

シオン　：っていうか忘れるなよ。（笑）

クリス　：というか、兄の存在も記憶になくて、こないだ会って初めて「そういや……」って感じだったから。

GM　：補足的に言いますが、マーカスは王室の研究家という立場にいて、指輪の研究者でもあったらしいです。指輪は元々何かのキーになっているらしく、伝説には『右手に獅子を、左手にグリフィンを／２つの鍵を星に捧げしとき／大いなる力目覚め／すべての闇を打ち払わん』という言葉があります。

シオン　：ほらー、指輪合わせるとか何とか言っちゃったから！（笑）

クリス　：ごめん。

田中　：ここでみんなが「ええっ」って言わなきゃならないところだったんですよ。

クリス　：「ええーっ！？」……とりあえず罪滅ぼしに。（笑）
フリーデ：言ってみーたー、って感じ。
クリス　：「そんな伝説がこの指輪に。私が王妃の子供……。子供といえば、兄さん……私には兄がいたはずではなかったのですか」
GM　：そうすると、ゲイルはきょとんとして「何をおっしゃります。貴女に兄などおりません。姫以外にエドワード王には子はおられません」
クリス　：「ということは、彼は一体誰なの？　私には……あれは確かに兄だと……」
田中　：いやー、お兄さんでしょう。
GM　：もしかしたらという形で言いますね。「貴女の乳母であった女性に貴女より年上の男児がいたはず。ひょっとして乳母と共に生活している時に、兄姉という感覚になったのかも」
クリス　：「そんな……」って感じで。
GM　：「貴女の育ての親に当たる女性も、貴女の素性を隠すため実の兄と同じ扱いをして育てたのではないかと」
クリス　：「私、彼に会ったかもしれないんです。帝国の兵になっていました。私は一体どうしたらいいんでしょう」
GM　：「私からは何も申し上げることはできません。私が貴女に伝えられることはこれが全てでございます」
クリス　：「……わかりました」
GM　：「貴女にこれから忠誠を誓います。王国復興のために力を注いでいただけませんか」と跪きます。
クリス　：そうね、そしたら「やめてください」って言って「王国の復興なんて。今の私には……」って感じで言葉を詰まらせます。
シオン　：そのまま扉を開けて外に出ていく！
クリス　：あ、それでいこっか。
GM　：しょうがないって感じで「話があまりにも唐突なため、受け入れがたいところもあるでしょう。ただ、事実を踏まえてしばらく考えて結論を出してください。私は待っています。私たちの部下も全て。レキもそう思っているでしょう」
クリス　：「レキさん……レキさんも全てを知っていたんですね」
シオン　：知っていて黙っていたんですね。
GM　：実はゲイルほど詳しい情報を知らなかったんですけどね。
クリス　：「しばらく考えさせてください」と部屋を後にします。
GM　：何かすることがあればどうぞ。
クリス　：うーん、ヒロインっぽいことしたいけれど疲れてきたんで、今回はこれで。（笑）
フリーデ：お疲れさまでした。
GM　：あなたの中には謎が残りましたね。確かに乳母の子供を実の兄として……という理屈は通りますが、自分の中ではどうもおかしい、兄じゃないのかという気持ちがあります。

ＳＣＥＮＥ　３　シーンプレイヤー：ジール・田中

シオン　：クラリスとしっぽり？
田中　：全然、そんなことないですよ。
GM　：無事戦闘から脱出しゲイルとも合流を果たし、補給物資の輸送も終わり任務も一段落つきました。付近には不審な船もおらず、久しぶりに自室でのんびりとしたひとときを過ごしています。
田中　：そこで一言、「アレは彼のベッドの下に隠してあるから大丈夫だ……」
GM　：あなたが休んでいると軽くノックの音がします。同時にクラリスが「ジールさん、よろしいでしょうか」
田中　：「いいですよ。開いてます」
GM　：……開けさせるんですね。そうすると、「すいません、ちょっと開けてもらえますか？」
田中　：ばっと開ける。
GM　：と、焼きたてのクッキーの皿と紅茶のポットを持っています。
田中　：「これはありがたい、一つ食べよう」と、普通にもらいますよ。
GM　：「どうですか？」
田中　：……おいしいかまずいかはプレイヤー次第なんですか？
GM　：ビジュアル的な面から察してください。
田中　：どっちなんだー！？
シオン　：正当派ヒロインは普通においしいと思いますよ。ドジっ子萌えなら塩の方がいいんじゃないですかね？
GM　：じゃ、クッキーはおいしいです。
田中　：「これはおいしい、かたじけない」と言いながら書類に目を通します。
GM　：「よかった」と満面の笑みを浮かべながらテーブルの上に置いて「お茶にしましょ？」と。
田中　：えーと、「申し訳ない、この書類がまだ終わっていないので」と書類の整理を。
シオン　：さっきまでベッドに寝っ転がっていたくせに。（笑）
GM　：「この間のこともありますし、いろいろ報告書をまとめるのも大変ですものね。真面目なのもいいですけど、体も大切にした方がいいですよ。だってジールさん、あなたが思っているほどあなた一人の体じゃないんですよ」
シオン　：『既にもう私のお腹にはあなたの子供が……』（笑）
GM　：ねえよそんなの！
田中　：普通に作業をして「ありがとうございます。仕事もあるんで」と追い返す。
GM　：「クッキー、置いていきますね。あとこれも」とティーポットを置いていきます。出る前に振り向いて「ジールさん、こないだはありがとうございました」
田中　：そういわれても、冷たく「いや、それは私の仕事の一つだ」と。
GM　：「あなたならきっと来てくれると思っていたわ。じゃ」と去っていきます。
クリス　：いい子だねえ。
シオン　：やべ、この女絶対地雷系だ。
田中　：仕事をやめて寝っ転がって、「ニンジャには、家族、不要……」と言ってフテ寝する。
GM　：最後に何かあればそれで切りますが。
田中　：いや、「今日はもう寝るかな」って寝て終わり。

ＳＣＥＮＥ　４　シーンプレイヤー：レキ・ストランド

GM　：無事に補給物資の受け渡しも終わりました。被害も出ましたが死者は奇跡的にゼロ。
レキ　：ゼロ！？　すげー。
GM　：確かに１人か２人くらいは死ぬ寸前までいきましたが、クラリスの献身的な看護――実は《イドゥン》（ホワイトメイジの加護。キャラ一人を復活させる）なんですが――で、奇跡的に命を取り留めたと。
レキ　：人的被害は出なかったと。
GM　：破壊自体も、ホワイトスネイクにちょこっと被害が出たぐらいで大したことはなく、無事に任務終了という形です。あなたは今どこにいますかね？
レキ　：物品の受け渡し項目などの書類を持ってゲイルのところに行きます。
GM　：そうすると、ゲイルはつまらなそうに病室にいますね。「開いているよ、入れ」
レキ　：書類を渡しながら「具合はどうだ？」
GM　：「酒が飲めねえのがつまんねえな」
レキ　：「お前、その体で飲めるわけがないだろう」
GM　：「酒は薬っていうじゃねえかよ。こんな時に飲まないでどうするんだ。……な、持ってきたんだろ？」と言いますね。
レキ　：傷口のところにがしっと手を置いて「こんな体で飲めると思っているのか～」
GM　：「イデッ、そういう堅苦しいところは変わってねえなあ。しょうがねえ、自前で……」とベッドの奥から忍ばせていたボトルを。（笑）
レキ　：取り上げます。
GM　：「何するんだー！」
シオン　：飲むと、ぶっと吹き出してお茶が入っている。裏見るとクラリスが『ダメですよ♪』って。（笑）
GM　：「今回、大変だったな。でも姫さんが見つかったということは非常にありがたいことだ」
レキ　：「やはりクリスはそうなのか」
GM　：「あの面影、間違いない。しかも話によればあのアームドギア、例のシステムが使われているそうじゃないか」
田中・レキ：例のシステム？
GM　：まあ、口裏合わせるくらいにしておいてください。後で語りますんで。「これで王都ハイ・ウェストリのシステムに行くことができる」
レキ　：「あの例のシステムか」
GM　：「マーカスも大変だったろうな。まさか自分の息子に宿命をゆだねることになろうとはな」
レキ　：「皮肉なものだ……」
GM　：「ああ。母もああいう形になって……」
レキ　：……全然話がわかんねー。（笑）
GM　：母親だけは説明しておきます。シオンの母親はウェストリ王国の騎士です。あなた達の同僚ですね。
レキ　：だったわけですね。
GM　：「この戦乱を鎮めるためにも、あと少し彼らにはイバラの道を歩んでもらうしかあるまい。本来は俺たちが取らねばならない責任だが……」とひととおり話した後で「やっぱり湿った話はいかんな。俺の性に合わない」
レキ　：「お前は、話しているより飲んでいる方が多いからな」
GM　：「だろ？」と、いつの間にか瓶を取ってますね。ぱかっと開けて飲んで、やっぱりぶっと吹きます。「何だコレ！」
レキ　：どうしてもやりたかったんだ？

GM　：「最悪だ……。ケガが悪化しそうだぜ」
レキ　：「それだけ減らず口が叩ければ大丈夫だな」
GM　：「『不死身のゲイル』と呼ばれていたくらいだからな。今回はさすがにキツかったが、また死ぬわけにはいかないな」
レキ　：「次に会う時には酒でも飲めるような体でいてくれ」
GM　：「おう。次は王国で一緒に騎士としてかな」
レキ　：「それがいいな」

ＳＣＥＮＥ　５　シーンプレイヤー：フリーデ　（同行者：シオン）

GM　：フリーデさんは元気でいる彼を見て、とりあえず安心していますね。あの戦乱の中で無事に生き残ることができたわけですし。
フリーデ：っていうか、自分だけでは守りきれなかったのでそれは気に病んでます。
GM　：シオン、登場していいですよ。
フリーデ：えー！？
シオン　：フリーデと自分の部屋で布団に入ろうとすると、なんか中にあるなと思って手に持って見る。瞬間、フリーデの死角に隠す。
GM　：コソっとしたものですね。（笑）
フリーデ：私、同じ部屋なんですか？
GM　：あ、彼の部屋と同室だと思ってください。御守りする立場なので。
シオン　：「フリーデ。僕、ちょっと出かけてくるね」
フリーデ：「シオン様……。今、何か背中に隠されませんでしたか？」
シオン　：「気のせいです、うん。フリーデはここで待っててくれればいいから」
フリーデ：「ちょっとお待ちください。危険なものかどうか確認してみないことには……」
シオン　：「いや、大丈夫だよフリーデ！」って扉の方に。
フリーデ：「それで私があなたを御守りできなかったとしたら、どうすればいいのですか」
シオン　：「僕も成長しているんだ。ちょっとぐらい僕の自由意思を認めてくれてもいいだろう」
フリーデ：「今回、何度か死にかけた方が何をおっしゃいます！　さあ、その背中にあるものをこちらへ！」
シオン　：「フリーデ……これはダメなんだ……これは僕が……」
GM　：そうすると、扉のドアががちゃっと開いて――ごめんなさい、シオン君。ソフィーさん登場。「シオンさん、あれ？　どうしたの？　調子が悪いの？」
シオン　：「いや、何でもないっすよ」
GM　：フリーデの方に目を向けて「どうしたんですか、調子でも悪いんですか？」
フリーデ：「いえ、そういうわけでもないようですが……あ、シオン様、どちらへ行かれます！」
シオン　：「いや、ちょっと～」
レキ　：クリスさんも出していいですか？　レキが稽古をつけるために呼んできてくれと言われたと。（笑）
GM　：いいですよ、どうぞー。
シオン　：「僕ちょっと田中さんのところに行って来るから！」
クリス　：（肩に手を置く感じで）ぽん。
シオン　：「……」
クリス　：「シオン君、レキさんが訓練つけるから来てって」
シオン　：「……ああそうだったよ忘れてた！　僕行くね！」
クリス　：「ねえ、なんかお腹ふくらんでない？」
GM　：フリーデさん、あなたのシーンなんですけど？
フリーデ：え？　いや、そのまま仲良くたわむれながら逃げていくシオンを見つめていますよ。
クリス　：シオン君、待ってーと。
田中　：ちょっと見えそうな感じなんじゃないですか、そのコソっとしたもの。
フリーデ：じゃ、それで私の目がピッと隠しているものを捉えて、ピピッと分析して「……今回は見なかったことに致しましょう」と。
シオン　：ドンドンドン！　「開けてください田中さん！　早くしてくださーい！　き、来ちゃう……！」
田中　：「ｺｿｰﾘしておけ、ｺｿｰﾘ！」

クリス　：「シオン君、レキさんが呼んでいるよー」
フリーデ：私はそれを生ぬるく見守っています。
GM　：じゃ、そこでフェイドアウトするということで。
シオン　：「み、見つかっちゃう～！」
田中　：そこはアニメ的にいうと丸が小さくなっていくイメージで。

おわり。